索もこの篇はせぬ。何に限らず、歴史はあまりに揣摩臆測にすぎると、何が何やら分明らぬやうになるのである。自然界のことでも、今吾等が眼に見、耳に聞き、手に觸れ得る自然界のことでも、はつきりと物事の原因とか結果とか歴史とか分類とか云ふことを說き明かさうと思ふと、一寸句切りがつけ憎いものである。われらの論理的思想は何にもかも截然たる區劃を要求し、數學的に分明ならんことを欲するのであるが、實際の現象は中々そんなわけに行かぬ。植物と動物と何處できちんと分かれるかと云うても、それはわからぬ。水と湯と何處で區別すると尋ねても寒暖計の一度から二度へ還るところが、はつきりせぬ。いつから猿が人間になつたと云うても、何年の何月何日と云ふことが出來ぬ。こんな區分とか起原とか云ふものは、思想の上では判明してをるやうでも、實際の上、歴史の上では、曖昧してをるのが事實である。此點から見れば、支那の禪宗を達磨からとしてもよし、鳩摩羅什からとしてもよし、また慧能からとしてもよい。達摩が居なかつたと云ふなら居なくともよい。達磨と云ふ名の歴史的人物は居なくとも、誰か達磨に似たことをやつた人間が、一人でもよし、二人でもよし、をつたものとしておけばよい。必ずしも梁の普通元年か八年に南天竺から來たとしなくてもよい。また武帝との問答もなかつたものとすれば、ないでもよい。もし達磨が「廓然無聖」と云はなかつたにしても、誰かの心にそんなことが起つてきたことは確かなのである。此編の目的は、それ故、この確かなところだけを目的としておく。歴史上の人物の名は何でもかまわぬ。今殘つてをる書物に書いてあることのみが、歴史上に出來したわけでない。否、書いてあることの方が或は却て訛傳とか錯誤とか云ふものであるかも知れぬ。所謂歴史なるものに書き殘されなかつた「事實」がどのくらい澤山あるかわからぬ。さうしてかく書き殘されなかつた事實が、書き殘された事實を、どこまで否定(コントラディクト)し、どこまでコラボレートするか、今から見てわかるものでない。予は所謂る歴史なるものに對しては寧ろ懷疑論者である。それはさうとして、唐僧傳（大唐、西明寺沙門、釋道宣撰、續高僧傳）第十六卷所載の達磨傳を紹介

しよう。

『菩提達摩は南天竺の婆羅門種であつた。神慧疏朗にして、聞くところある皆曉悟せざるはなかつた。この志す所は大乘で、冥心虛寂を務とした。徹に通じ、數に徹した上、之を高むるに定學を以てした。此邊隅を悲しく思ひ、法を以てこれを導かんため、初め宋境の南越に達し、それから遂に又北の方へ度つて魏に到り、止まる處ごとに禪教を以て教誨した。この時國を擧げて盛んに講授を弘めてをつたものであるから、乍ち定法を事とするものの現はれたのを聞きて、譏謗を生ずるものが多かつた。

「道育、慧可と云ふ二人の沙門があつて、其年は後輩であつたけれども、鋭志高遠であつた。初めて達摩と云ふ法將に逢うて、道は誰の處に歸してをるかを知り、親しくこれを尋ねて、事ふること四五載を經過した。給供諮接、少しも懈らなかつた。達摩も其精誠に感じて、眞法を以て之に誨えた。

『是の如き安心とは壁觀を謂ふのである。是の如き發行とは四法を謂ふのである。是の如く物に順じて教を受くれば、譏嫌を護し、是の如く方便して教を受ければ不著なるを得るのである。然らば則ち入道の途は多いけれども、要するに二つの種類に纏めてよからう。即ち理と行とである。

「教を藉りて宗を悟り、深く含生の同一眞性を有することを信じ、客塵に障えらるゝが故に、これをして佛を捨てて眞に歸せしめんため、壁觀に凝住する、さうして自もなく他もなく、凡聖を等一し、此に堅住して移らず、他教に隨ふことをせぬ、道と冥符して寂然として無爲である、これを名づけて理入と云ふのである。

「行入には四行がある、萬行悉く此中に攝せられてをる。初めに報怨行とは、道を修めて苦しき思ひをすることがあつたなら、當さに過去を觀ずるがよい。本を捨て末を逐うて多く愛情を起したからである。今生には何等犯したことがないけれども、我が宿作は甘心してこれを受ける、更に怨訴を念はぬ。經に、苦に逢うて憂へざるは、識達するが故なりと云うてある。此んな心念が生ずると、其時道と相應して違ふことが

ない。怨を體して道に進むからである。

「二に隨緣行とは、衆生はもと無我である、苦樂は緣に隨うて存在する。たとひ榮譽なことなどがあつても、それは宿因の所構で今之を得たのである。緣がつきて終へば還たなくなる、何にも喜ぶべきことはない。得と失とは緣に隨うてあるので、心其ものには增減はない。違順風靜、共に法に冥順するまでである。

「三には無所求行である。世間の人は長く迷ひつつある、さうして到る處に貪著してをる、是を名づけて求むるものと云ふ。有道の士は眞理を悟つて俗人と相反してをる、安心無爲である。が、形相の上からは業に隨つて運轉してをる。三界は皆苦ならざるはない、誰一人として安らかなものあらず。それで經には、求むるあるは皆苦なり、求むるなきとき乃ち樂なりと書いてある。

「第四に稱法行とは、即ち性淨の理を云ふのである。

「達摩は此法で以て化を魏の國に開いた。識眞の士は彼に從ひ、彼の旨を奉じて悟に歸した。其言語を錄した書卷は世に流行してをる。達摩は自ら百五十餘歳であると云うてをつた。諸方遊化を務となしてをつたが、其終りは何時であつたか測られぬ。」

此略傳とも云ふべきものの結末の句を見ると、達磨の言語を錄した書卷が道宣の世に流行してをつたものと見える。今でも尙「少室六門集」と云うて六編の著述が達磨のものとして殘つてをる。併しこれは彼自身の作ではなくて、後世誰かが其名を假りて著作したものとも見える。前記した「四行觀」も「六門集」中に收めてある、「第三門、二種入」とあるのが即ちそれである。文句は多少相違もし、增減もあるやうである。六門とは何かと云ふと、第一、「般若心經頌」。第二、「破相門」。第三、「二種入」。第四、「安心法門」。第五、「悟性論」。第六、「血脈論」である。これは始めから一部の「六門集」として傳はつたのではなく、其中のあるものは「傳燈錄」などより集めたのである。日本で編纂せられた書物で、支那には別別の名で流行してをる。此書は僞作であつて達磨の自作でないと云ふのが、一般の說である。但其中の「四行觀」だけは

「續高僧傳」にも出てをるので、それは達磨のものならんと云ふことである。「般若心經頌」は本當のものとは思はれぬ、けれども、外の「安心法門」は「宗鏡錄」や「傳燈錄」などにも見えてをるので、もし僞作としても、唐代に早く出來てをつたものであらう。併し達磨の眞作ではないにしても「六門集」の諸編は禪宗の哲理を說明したものとして有益な參考書たることを失はぬ。

六　祖　慧　能　傳

釋尊を禪宗の元祖とし、摩訶迦葉を第一祖とすれば、それより的的相承して第三十三祖となれるもの、これを慧能と云ふ。慧能は支那における第六祖である。所謂る禪宗といふものの精神と形骸とが全く備はりて、此に一種特別の宗旨となつたのは實に六祖より始まるとして宜いのである。或はかう云うてもよい、達磨が印度から傳へて來た禪法が完全に支那化して來て、教相的臭味もとれ、印度風の觀法的習氣もなくなるやうになり、大に人生の實際と接近して來たのは、六祖の時代からであると。これはどちらでもよい。とに角、慧能は禪宗の發達史上極めて大切な人物である。併し今は彼を歷史上から見るのでなく、只一個の宗匠として其出所進退を述べるに止める。

慧能は唐の貞觀十二年に生れた(西曆六百三十八年)。俗姓を盧氏と云ふたが、父を三歲のときに失つた。もとは漢陽の人であつたが、父は嶺南に遷つた。即ち今の廣東地方で、昔はなづ夷狄視せられた所である。母は再婚もせずに遺子を一所懸命に鞠養した。固より母一人の瘠腕では立派な生計を立てること思ひも寄らぬ。小供が生長するに隨ひて貧苦のほども想像に餘る。それで慧能は山へ往つて薪を採り、それを市に鬻いで活計を立てることにした。こんな身分では 敎育を受けるなど 云ふことも出來ず、志はあつても何とも仕樣がない。併し他日宗敎界の木鐸となつて達磨の正宗を東洋の天地に樹立した人であるからには、只其日〳〵をぼんやりと暮さなかつたに相違ない。機會あらば讀書もしたいと思ふたらうし、また殊に天地自然の現象につき、色色と考へたに相違ない。さうしてまた斯く色色と思ひ惱むところの自分は何であるか

と深く省察したであらう。果せるかな、一日平常の如く薪を引擔ぎて市へ賣りに行つたが、購客の中に金剛經を讀むものがあつて、これを聞くにつれ、恍然として省發する所があつた。平生より此邊の消息について思を潛めてをつたものであるから、忽ちにこんな心的經驗があつたのである。此時慧能は二十四であつた、天才の青年なら此年頃に大抵何かの人生觀を得てをる。それでお客にお經の名と其出處とを尋ねて、始めて金剛經なるものあることを知り、また黃梅山に五祖弘忍の在ることを識つた。それからと云ふものは安閑として薪賣りをやつて、その日〳〵の活計をたてることが、もどかしくなつた。どうかして明師に就いて深く大法を研究したいとの志勃勃として禁ずることが出來ぬ。そこで母と相談して遊學のことに決した。此時の母の心持は察するに餘りある。一人息子を今まで世話して、自分の側で愛撫もしたり、奉養もせられたものを、遽かに外へやると云ふこと、それも金持の身分なら兎に角、貧乏世帶では、母子の別は血の涙であつたに相違ない。人生悲慘な事は多い。併しそれよりも、より大にして、積極的の事業があるなら、個人的得失はどうしても度外せねばならぬ。この苦しい處を實際に味あうた人でなければ、人生の眞趣を語ることが出來ぬ。

慧能はそれから廣東の韶州へ行つて劉志略と云ふ高行の士を賴つた。志略の姑に無盡藏と云ふ尼さんがあつて常に涅槃經を讀んでをつた。慧能はこれを聞いて、尼のために其義理を說明してきかしてやつたら、尼さんは義理だけでは滿足せず、一一の字句に就いて、その義を知らんとした。讀書の人はいつもこんな處でひつかかる。一得一失である。慧能の曰はく、「私は文盲でその字義は知らぬ」と。尼曰ふ、「字の意義がわからいで、どうして全篇の意義に通ずることが出來るか」と。普通の眼から見れば尤もである。所が、慧能は元來尋常問學を事とするところの人ではない、また全く眼に一丁字なしと云ふことでも無かつたらうが、とに角、その眼のつけどころは違つてをる。乃ち曰ふ、「諸佛の妙理は固より文字などに關はるものではない」と。尼さんもさるもの、これを聞いて誠に其通りと、大に感心し、その鄕里の宿老どもに、慧能

が異常の人物なることを告げ、ただ此儘にしておくべき次第にあらずと云ひ出した。鄉人の信仰心、ここに動き始めて、近邊の廢寺になつてをつた寶林寺と云ふのを再建して、慧能を其處の住持に祭りこんだ。四方より此寺にやつてくるものが多くなつたので、もとの廢寺も今は中々の寶坊と一變した。（此段の紀事を缺いた傳記もある。）

普通の凡物などは、これで滿足したかも知れぬが、慧能の志は雲霄に在りで、一日ふと反省した。「我は元來大法を求めてをるものである、こんなに中途にして自ら足れりとすべきでない」と、さう思ふと何もかも打ちやりて、其處を立ち去つた。昌樂縣の西山と云ふ處に住き、石室の裡に坐禪してをつた智遠禪師と云ふ高德を尋ねて、法要を學ばんことを請ふた。智遠は慧能の樣子を熟視し、「われ子を觀るに神姿爽拔、尋常の人とは思はれぬ。到底わが如きものの弟子として敎ゆべきでない。聞く所によれば西域より傳道にやつて來た菩提達磨の心印は今や傳へて黃梅山の弘忍大師に在りと云ふことである。汝寧ろ彼處へ往つて參決を遂げたらよからう」と敎へられた。慧能すなはち黃梅山（現時の湖北、黃州に在り）に向つて出發した。これは唐の龍朔元年で、西曆六百六十一年。

慧能は此時尙居士であつた。正式の得度はうけてをらぬ。愈々五祖の處へきて相見を願つたが、五祖は「汝は何處から來た」と尋ねる。能、「嶺南から來ました。」五祖、「何のために此へ來た。」能、「佛と作りたいと思うて來たのである。」祖、「嶺南の人には佛性がない、いくら佛とならうと思うても駄目である。」如何にも辛辣な取扱である。平たく言へば「貴樣はまだ夷狄だ、作佛なんどと方外な考を起すな」と、頭から嚙みつかれたと同じことである。さうしたら盧慧能は「人には南北の區別もあるが、佛性にそんな區別があるものでせうか」と答へた。慧能は元來多く文學に親しむ餘裕のない人であつたから、こんな答も分別理解の上から出たのでない。全く自家の內的經驗からして迸しり出た自然の妙答と云はなければならぬ。ここが吾等と違ふところである。哲學上の理屈ぐらゐなら何でも滔滔とやれぬことはあるまいが、實地の境涯

から云ふと、一文錢にも値らぬ。一毛巨海を呑み、芥子に須彌を納るなどと、理の上では何のかのと說きまわすが、さあ實地の上でどうぢやと突き込まれると、まご〳〵して仕舞ふ。六祖のやうな人の言語は皆直覺から來てをるものと見なければならぬ、概念上の話ではない。

五祖はこれを聞いて、これは一通りの人物ではない、餘程內的經驗を積んだものであるとの判斷がついた。併し今かれを讃め立てるはよろしくない、尙實地の修錬をつまさなければならぬ、また嫉妬心に富める雲水どもの手前もあると、かう思ふたもの故、五祖は慧能をして米搗き役に當らしめた。「わかつたやうなことを言ふな。米つきでもやれ。さうして大衆の後について、吾說法をきいたらよい」と、五祖はやられたに相違ない。六祖はこれに對して何等の不平も言はず、唯唯として碓坊に立て籠り、杵臼の間に勞役した。傳燈錄にはそれから只「晝夜不息」と書いてあるが、これは米や麥を搗くことを日夜止めなかつたと云ふのではあるまい。見性の修行において夜を日に繼いで精勵したとの意義である。これは餘論であるが、禪宗の修行に勞働のついて廻はつてをるのは、六祖が米搗きをやつてをつたと云ふ歷史上の事實など、大に與つて力あるものではないかしらん。實際の上から言うても、修禪には身體の勞作が極めて肝要である。坐禪ばかりしてをると、空想に耽けり迷妄顚倒の概念のみが簇起して來て、人は只靜思昏沈の死骸となつて終ふ。實地の境涯を尊ぶ禪宗では、動力的生活をやつて、內面の靜力的傾向と均衡を保たしめねばならぬのである。一日作なざれば一日食はずと云ふ主義だけで、勞働をやるのではない、心理上の原因がまた大に手傳つてをるのである。されば六祖の米搗も、唯賤しい勞役に甘んじて就いたと云ふことの外に、更に意義の深長なるものがあるを見るべきである。

六祖はかくの如くにして八箇月の間、勞働三昧に兼ねて修禪三昧であつた。此間の密密の修行は、書物には何とも書いてないが、如何にも精神を竭してやつたものに相違ない。五祖も亦機に觸れて六祖の內的生涯の向上を認めつつあつたに相違ない。會

下には七百餘人の雲水があつたと云ふことであるが、其中に本當の宗旨を傳へ得べきは、慧能一人であることは、既に相見の當時ちやんと見拔いてあつた。愈〻其得處を知りたいものと思ひ、且つは大衆のためにもこれを知らせたいと思ひ、一條の布告を發した。曰はく、「正法は容易に解せらるるものでない、汝等徒らに吾言語を記し留めておいても、何の役に立たぬ。寧ろ自分の見解を一箇の偈にして吾に呈し來れ。もし其意にして吾宗と冥符せば、衣法共にこれを其人に付し去らん」と。其頃は別に入室と云ふことも、參堂と云ふこともなかつたのである。禪宗發達史の最初であるから、樣樣の修禪の機關はいまだに具はつて居なかつた。また學人の見處を檢するにも一片の偈頌に訴へると云ふことの外に、何等の活機活用もなかつた。禪はそれほどまでに發展しなかつた、支那化しなかつたのである。

神秀と云ふのが七百人の大衆の中でも內外の學問に精通してをつたので、其上座をしめてをつた。それで五祖の繼續者たる資格が充分にあるものと、吾も人も思うて居た。彼は廊下の壁へ一首の偈を書して自家の見處を吐露した。

「身是菩提樹、心如明鏡臺、時時勤拂拭、莫遺有塵埃。」

これは所謂る靜觀默照主義の唱道である。屹度其頃には禪を以て心を澄ますところに在ると思うてをつたものが澤山あつたに相違ない。神秀は其主義を最も有力に代表したものであらう。七百餘人の無眼子の面面はこれが宗旨の當體を得てをると思ひ、これを念誦し始めた。五祖は經行の序でにこれを見たが、固より未だ眞に禪を會せざるものなることを知つて居た。しかし修禪もこれを便りとして次第に進んでやつて行けば、惡い事をするのではないから、何かの勝果を得ることであらう。これだけの修行でも出來れば、誠に結構である。それで五祖は此偈を讃歎して大衆に其意旨を領するやうに慫慂した。

米搗きの慧能も此偈を聞いた。けれども、彼には既に一隻眼が具はつてをる、こんな靜觀主義では本當の心地を明められぬ、これでは所謂る佛境界に入り得れども魔境

界に入ることが出來ぬ。彼は文字こそは神秀首座ほどにはわからぬけれど、禪は既に得てをる。それで自分も一偈を書かうと思ふた。しかし自分は文字をあまり知らぬからして、他人に賴んで書いて貰はふとしたが、彼等は「此文盲の米搗め、何がわかるか、生意氣な」と云ふ風で相手にしなかつた。七百人の雲水、如何に文字に拘泥し、葛藤に纏縛せられてをるかを見るべしである。これは何時の世にも變らぬこと、別に怪しむまでもあるまい。六祖は止むを得ず夜になつて潛かに一人の童子を儌ひ來り、神秀の偈を書してあつた廊下の壁へ、自分は燭を秉りながら、其童子をして次韻の偈一首を寫さしめた。（こんなことは事實であつたか、どうか、固より今からはわからぬ。併し戲曲的で面白い、さうして斯く戲曲的にせねばならぬ理由があつたものとすれば、六祖の出世は禪宗の歷史に餘程の影響があつたものと見ねばならぬ。）

「菩提本非レ樹ニ、明鏡亦非レ臺ニ、本來無シ一物ヲ、何假ラン拂フコトヲ塵埃ヲ。」

如何にも大膽な句である。文字を知らぬ米搗、少しの經文を聞きかじつたる慧能にして、此の如き破天荒の見地に住しをらんとは、何人も豫期しなかつたであらう。否、七百の大衆、一人と雖、未だ曾て此境涯に蹈み到らなかつた、窺ひ知ることすら出來得なかつたのである。昔世尊靈山會上の說法には人天の大衆、聾の如し、啞の如しとあるが、六祖の此偈に對しても、黃梅會下の一衆悉く沒交涉であつた。五祖は一見して六祖の心膓を徹見したが、今これを七百人の有象無象の面前に呈露して、さうして米搗一人を證明するわけに行かぬ。盧行者はまだ僧となつてをらぬ、黃梅にきてから一年と經たぬ新到である、學解の才の愚者を服すべきものもない、まだ年も充分にとつてをらぬ、智はあつても聖胎長養はこれからである、人我の見山の如く海の如き大衆ばかりである、達磨は毒殺せられ、慧可は非命の最期を遂げた例もある、大法を荷負すべきものは、斯の如き怨恨の手より救はれなければならぬ。かういふ樣な理由からして五祖は慧能の偈を明はには否定した。併し夜になつてから慧能を自分の室へ私かに呼び入れて次の如く言ひきかした。（かく呼び入れるまでにも可なり戲曲的な紀事がある、今はすべて之を略する。）

「諸佛の出世は一大事因緣のためである、さうして當機の大小に隨ひて、これを導い

て皆道に入らしめるのである。十地、三乘、頓漸等の敎は皆ここから出でをる。これは敎門と云ふもの。此外に更に一個の法門がある、これを無上、微妙、秘密、圓明、眞實の正法眼藏と云ふ。これは上首の大迦葉尊者に傳へられた。さうして展轉傳授して廿八世を經て達磨に至り、それから我國に傳はつた。達磨はこれを慧可大師に傳へ、これを承け襲ひて今吾に及んだ。法寶と所傳の袈裟とを汝に授くるから、よく之を保護して斷絶せぬやうにせねばならぬ。」

かういふて次ぎに所謂る傳法の偈なるものを授けた。その偈に云ふ。

「有情來下レ種、因レ地果還生、無情既無レ種、無レ性亦無レ生。」

盧居士は拜跪して衣と法とを受け、それから五祖に向ひて曰ふやう、「法は今正に受けましたが、衣は吾後には誰れに付與致しませうか」。五祖、「昔し達磨の初めて當國に來られたときは、何人も達磨を信ぜなかつたから、衣を傳へて得法を明かにしたが、今や信心も既に熟して來たので、衣は別に傳へる必要はあるまい。衣があると却つて爭の本となるから、これは汝の身だけに止めて、後に傳へぬがよい。とに角、汝は遠くここを去つて、何處かに隱れて居れ。時節が來れば自然に世に出て化を行ふことであらう。衣を傳へられた人の命は嫉妬の目標となるから懸絲のやうに危ない。よく氣をつけねばならぬ。」慧能は、五祖が諄諄として法のために、末の末までを心配してくれるのを聞いて餘程感激したものであらう。固より始めから大法のために此身を捧げたものとは曰へ、今やかく五祖の訓戒に接しては、更に一段の覺悟を生じたのである。さらば何處に隱れてをつたら好いかと尋ねると、五祖は豫言的な言をいふた、「逢レ懷即止、遇レ會且藏」と。歷史上の事實では、慧能は廣東省における懷集四會の間に隱匿してをつたとのことである。

此に二三の注意すべき事實がある。第一には六祖が五祖の法を傳へたときには、まだ本當の得度を經てをらぬ、所謂る僧團の人ではない、行者と云へば一種の寺男と云ふべきもので俗人である。五祖は大法を傳ふるに當りて、其人の僧と俗とを問はず只

其機の適不適のみを考へた。また其の學と無學とを問はず、新と舊とを問はず、只其心地の明白なるか如何を考へた。大法の前には此の如き瑣細な詮索をする暇がなかつたのである。

次ぎに衣のことであるが、六祖はまだ僧侶になつてをらぬから、袈裟は不必要なわけである。固よりこんなものは一種の符號にすぎぬから、法を傳へたと云ふしるしだけで授受せられたとすれば、此外に何等の不思議もない。併し此袈裟をなぜ六祖に留めて後後に傳へぬことになつたのであらうか。五祖の言によれば、五祖までは禪に對する世間の信仰が充分でなかつたから、本當に佛より傳つたものとして、之を有形的に證示すべき象徴が必要で、其がため袈裟を初祖から今まで傳へた。併し六祖の時代では、もう禪法に對する世間の批評も下火になり、外道の譏もなくなつたから、之を傳授する必要がないとのことである。これが後世の吾等にとりては少しく腑に落ちぬ。傳衣の必要がなくなつたのは、單に禪に對する信仰如何と云ふことの外に、何か禪の歴史の上に面白き光明を投げる事情があつたのではないかしらん。或る人は、釋尊の袈裟を達磨が傳へて來たなど云ふことが、既に怪しい、三國傳來の佛舍利と云ふやうなものではないか、もしさうだとすれば之が六祖以後に傳はらうが傳はるまいが、どちらでも差支なく、又何の不思議もないことであると云つて退けて終う。併し わが考では此問題はかく容易に片附けらるべきものではない。何かもつと深い歴史上の意義がないかとも思ふ。

其意義と云ふのは、禪の本當の成立は五祖時代までは何にも認められなかつたので、達磨が印度から來やうが、「壁觀婆羅門」の名を博したに止まつた。禪を修するものは達磨以外にも隨分あつた、たとひ其が小乘的觀法の域を出でぬにしても、また間〻大乘的禪定と稱するものであつたにしても、達磨以後修禪の士は仲〻にあつたものである。禪法は餘程ひろがつてをつたやうに見える。六祖時代には、支那の宗教界は六祖のやうな人物を出し得るほどの形勢となつてをつた。併し何れの禪法家も禪と云

ふものだけを標榜して、これを一家の宗旨となして行くほどではなかつた。法華經の研究に兼ねて禪定を修むるとか、三論の宗旨に禪を交へたとか、淨土の觀法に修禪を加味したとか云ふものであつた。獨立の禪なるものはなかつた。隨つてわれは佛陀跋陀羅の禪を傳へた、鳩摩羅什の禪を得た、佛陀禪師の法を有つてをるなど云ふものは、少しも聞かなかつた。併し禪なるものはあつた、さうして或は山間僻地に退き、或は巖穴の中に端坐して、これを修してをつた。ここへ六祖慧能が起つて來て、禪と云ふものを一派の宗旨として、教門に對立させて、大に世に稱へ出したのである。六祖が世に現はれでるに從ひて、其系統を明にする必要が起つて來た。他の宗旨では何か經典か論部に根據を有してをつて、これを其宗の大原理と打ち建てるのであるが、禪宗にはそんなものがない。それ故、衣を傳へたとか、鉢を讓りうけたとか云ふことが必要になる。傳法の偈なるものも自ら出て來る。二十八祖までは殆んど型にはまつたやうな偈ばかりである、さうして別に教理上の偈と際だつて特色が出てをるとも思へぬ。（第二十二祖の「心隨萬境轉」云云の偈はこれを省く。）それから又達磨より六祖に至るまでは、華とか、種とか、實とか云ふやうなことが繰り返されて、前後如何にも相應し冥符してをるやうに見える。これは歴史的事實から來たのか、また何か教理上の深義があるのか、また禪を系統的に組織する必要よりして誰かが感得したものか、それは今此で詮索する限りでないが、とに角、支那では六祖のときからして、禪の面目が截然として改まつて見える、これだけはどうしても否まれぬ事實である。達磨の豫言に「至吾滅後二百年、衣止不傳法周沙界」とあつたとのことであるが、六祖が衣を傳へなかつた所以が、即ち禪法の大に支那に行はれ、日本に傳りて、今日に至るまで尚綿綿として絶えない所以なのである。

六祖の說法を記錄したと云ふ「法寶壇經」を見ると、五祖が六祖に心印を授くる時金剛經を讀んで聞かされたと書いてある。さうして「應無所住而生其心」の處に至りて慧能は言下に大悟したと云ふことである。併し此大悟は愈〻傳法と云ふときに始めて

起つたものなのではあるまい。六祖は既に法を會してをるのである、それ故五祖は達磨以來の袈裟をも授けんと云ふのである。それに愈〻と云ふ晩になつて、わざ〳〵金剛經を讀んで悟らせるも變な話と云はねばならぬ。これは六祖が黃梅山で米を搗きながら、或日五祖の金剛經を讀むのを聞いて、大悟したと云ふ意味に取るべきものであらう。とに角、六祖と金剛經とは餘程因緣が深いのである。達磨は始め慧可に楞伽經四卷を傳へたと云ふが、金剛經につきては何とも道うてをらぬ。金剛經の始めて支那に譯せられたは西曆四百年を少し過ぎた頃なので、達磨渡來の時代には菩提留支の譯もあつた筈である。禪宗で金剛經を說くやうになつたは六祖からである、或は五祖からとしてもよい。金剛經は支那において最も廣く行はれた佛典であつて、その註釋書は汗牛充棟と云うてよい。これは禪が擴まるに從ひて此經も盛んに行はるるやうになつたものと思ふ。とに角、六祖が金剛經中の「應無所住而生其心」によりて大に開發したと云ふは、禪宗の歷史において記憶すべき事實なのである。それで此事を一寸附加しておく。

五祖はかくの如くして慧能に傳法と傳衣とを終へたのち、其夜直ちに彼をしてまた嶺南に歸らしめた。此事實が黃梅山下の大衆に知れわたると、氣早な連中は大に騷ぎ出し、大切の袈裟を無學の米搗き男に取られたとあつては、吾等の面目に係るとでも思ふたか、慧能を逐ひて之を取り返さんとした。この一隊の長なるものを慧明と云ひて、在俗中は軍人で、麁行な男であつた。慧能はきつと故鄕の嶺南へ去つたに相違ないと見當をつけて大庾嶺方面まできて、遂に能に追ひついた。能はその抵抗すべきにあらざるを知り、衣はどこか其處らの石の上において、自分は草村のなかへかくれてをつた。慧明は其衣をとり上げやうと思ふたが、中〻あがらぬ。これは不思議のやうに思はれるが、あたり前のことである。元來此衣は信を表してをるのである。眞正の信を得て居ないものが、それを提掇しやうとしたとて、動くものでない。世に神罰とか冥罰とか云ふことがあるが、皆是れ不信の致すところである。基督が水の上を步行

いたとき、弟子がこれを不思議に思ひて、びつくりしてをると、「汝等、信なきものよ」と、基督は叫んだ。こんなところは宗旨の眼で見ねばならぬ。慧明は一種恐怖と慚愧の念に打たれて、盧行者の救を叫んだ。行者はのこ〳〵と叢裡から出頭してきて、「汝果して法のために來たと云ふなら、わが言ふところを篤ときくがよい。法は汝の如き輕心慢心欲心を以て得べきでない。よろしく諸緣を屏息して一念をも動かすなかれ。それが出來たら說き示してやらう」と道ふた。ここにおいて明は「良久」とあるが、暫らく禪定に入つたものであらう。六祖曰はく、「不思善、不思惡、正與麼時、那箇是明上座本來面目」と。明これをきくと忽爾省發するところがあつた。そこで彼云ふ、「上來の密意密語の外、また更に密意なるものあるべきか」と。能、「わが汝のために說きたるところは更に密にあらず、汝若し返照して自ら內に省みなば密は却つて汝が邊にある」。六祖の宗旨はもうここに現はれてをる。從來の所謂る禪宗なるものとまた更にその趣を異にしてをると云うてよい。

慧能大師は、これから嶺南の山谷の間に隱遁して靜に聖胎長養をやつた、それが十五六年間であつた。二十四歳のときに五祖を辭してから三十九歳か四十歳になるまでは、鳴かず、飛はず、密かに修養に修養を重ねた。大燈國師も乞食仲間にまで入つて修行せられたと云ふことであるが、六祖は一時は獵師の群へも交わつてをられたと書いてある。二十四にして擇法眼を獲られたとすれば、六祖は餘程の宗敎的天才であつたに相違ない。併し只それだけにて世に出られたなら、禪宗も其流を長くして、今日に及ぶやうなことはなかつたかも知れぬ。何ともわからぬ。其故われらは六祖が二十四歳までの修行を見るより、寧ろ眼をそれから四十歳に至るまでの間の鍛錬に注がねばならぬ。白隱和尙も二十四歳にして正受老人の處にて大事を了畢りたれども、其法において眞實に大自在を得たるは四十二歳のときなりき。其間實に十八年を經過してをる。あんな豪傑の人でもこれだけの修行をしないと完璧の人物となれぬのであつた。一旦の見處だけで決して休歇すべきでない。釋迦も彌勒も修行最中と云ふことが

ある。これは亦別に意義のあることでもあらうが、吾等に不斷の勤行の必要なることを說き示すにおいては、此語よくこれを盡くせりとしてよい。

ある日慧能は弘法の時機愈〻熟したことを感得した。彼は充分の自信が出來たのである。そこで隱遁の處を出て、廣州の法性寺にやつてきた。ここでは印宗法師と云ふのが涅槃經を講じてをつたが、これを聞きにいくらかの僧侶が集まつてゐた。時に風が吹いて來て、そこに建ててある幡を動かした。一僧は之を見て風が動くと云ふた。又一僧は風が動くのではない、幡が動くのであると云ふた。議論仲〻はてしもないので、之を聽てをつた慧能は口を出した、「それは風が動くのでもない、幡が動くのでもない、あなたの心が動くのである」と言ふた。この意表外の言葉を聞いてそこに集合した衆僧は愕然とせざるを得なかつた。この田舍漢何を知つてをるかと思うてをつた所、經典そのままを聞くが如き妙句を吐いた。それのみならず、かく言ひ出した樣子に如何にも凡人ならぬところがあり、如何にも權威あるものの如く言ひ出した。一會の衆も畏敬の念を起さぬわけには行かぬ。印宗和尙もそれを感じた。そこで慧能を上席に延いて佛敎の奧義につき色〻と問答を始めて見ると、その言ふ處如何にも簡にして而かも要處〳〵をちやんと押へてをる、文字言句を離れて別に宗旨を擧揚する所、到底普通の佛敎者とは思はれぬ。印宗大に感服して、「あなたは定めて常人ではあるまい。嘗て黃梅の衣法傳へて南方に來たと聞いてをつたが、あなたが其行者（ぎやうじや）ではあるまいか」と尋ねた。慧能は「仰せの通りでござる」と返事したので、和尙はその袈裟を見ることを乞ふた。そこで能はこれを出して見せる。大衆一同今は何等の言議を容れぬ。その人を見、その衣を見た上は、此田舍漢を以て達磨の正傳を得たものとなさざるを得ぬ。それから又多少佛法上の話があつて、結局は和尙をして「わが經を講說するは猶ほ瓦礫の如しであるが、あなたの論談は眞金の如しである」と云はしめた。

それから慧能を本當の坊樣にしてこれに師事したいと云ふことになつた。法性寺における出來事は唐の儀鳳元年正月八日であつた。即ち西曆六百七十六年に當る。慧能

の得度式はそれから一週間を經て正月の十五日に行はれ、次の月の十五日には諸名徳を集めて具足戒を授かつた。その戒壇は宋朝の求那跋陀羅三藏の創建した所で、此三藏の豫言に「肉身の菩薩ありてここに授戒すべし」とあつたとのことである。また此壇の畔りに一株の菩提樹を植えてあつたが、それは梁の智藥三藏が西天竺より移植した所で、彼も亦豫言して「肉身の菩薩ありて此樹下で上乘を開演し、無量の衆を度し、眞の佛心を傳ふるならん」と云ふた。六祖大師は此の如く豫言せられ、此の如く祝福せられて、唐の天地に大獅子吼を始めたのである。併し彼は此處に永く留まることをせず、明春曹溪の寶林寺に歸り、此に大梵刹を建てて禪宗發源の地を定めた。それから説法利生三十七載にして、唐の先天二年、即ち西暦七百十三年に示寂した。世壽七十六。

六祖一代の説法を知らんには「法寶壇經」を見るべきである。此書には種種の交り物があつて、後世附け加へた處もあらう。併し此書を讀んで行けば所謂六祖時代の禪風の如何なるものであつたかが窺はれる。詳しいことは別に一篇を草することとして、此に宣詔第九中の一節を引用して、此傳を結ぶ。則天武后が六祖の盛名を聞いてこれを朝に召せんとしたが、六祖は固辭して林麓に終へんことを願ふた。その時の使の薛簡と云ふものが、六祖に尋ねて曰ふ、「京城における禪德は皆云ふ、道を會せんと思はば、必ず坐禪して定を習らはねばならん。もし禪定に因らずして解脱を求めんとしてもそれは無益である、到底不可能であると。師はこれに對して如何なる説法をなされまするか。」六祖これに答へて曰ふ、「道を悟るは心に由りて悟るのである、坐禪に是れ由ることはない。經に若し如來を以て若しくは坐、若しくは臥となすものあらば、是人は邪道を行ずると書いてある。何故となれば、如來は本より從來する所もなければ、亦去るところもないからである。無生無滅これが如來清淨の禪で、諸法空寂これが如來清淨の坐である。究竟じて本來證すべきものがないのである、まして坐禪とか習定とか云ふ如きものにおいてをや」と。これが六祖の「本來無一物」の處であ

る。六祖は此眼を以て一切を斬りまわつたのである。併し此に注意すべきことは、文字に執着してその精神をわすれることである。特に始めにも言ふた如く、六祖の言葉は推理や概念の上から出たのでなくして、其内的、心的經驗より直接に言語に發したものであるから、讀者も其意を體して、直に六祖の肺腑を見拔くことに勉めねばならぬ。尋常一樣の說法家や講敎師の觀をなすべきでない。此事はくれ〴〵も注意しておきたいのである。

六祖の傳記と說法の跡を見るには、前述の通り「法寶壇經」（又は「六祖壇經」と云ふ）であるが、此書は純粹のものでないらしい。眞僞混淆してをることは事實としてよからう。併し最初にも言ふたやうに、歷史の細かなところは、詮索にすぎると、何が何やら無分曉となつて仕舞ふもので、まづ大抵のところに止めておくが、策の得たるものであらう。「壇經」の所說なども大體は六祖自身の所說として差支なからう。六祖傳を調べようと思ふ人は、「壇經」の外に「宋高僧傳」（西曆九百八十二年編成を始ひ）卷八、「景德傳燈錄」卷五（西、千四年編了）、「佛祖統記」（西、千二百六十九年成）卷二十九、「佛祖歷代通載」（西、千三百四十一年成）卷十五、十六、等を見よ。松本文三郎博士著、「金剛經と六祖壇經」（大正二年、京都貝葉書院）及び境野哲著「支那佛敎史綱」（明治四十年、東京森江本店）をも參考してよからう。境野君の書は達磨及び慧可の紀事につきても意見がのべてある。

次ぎに參考のため初祖達磨より六祖慧能までの年代表を示す。達磨は道宣によれば、其終はる所を知らぬとあるが、「景德傳燈錄」によれば、魏の孝明帝太和十九年、即ち孝莊帝の永安九年、即ち梁の大通二年に、他のために毒害せられたとある。これを本當とすれば、達磨は西曆五百二十八年に示寂したのである。今大正五年を去ること實に一千三百八十八年。さうして達磨の支那の南方へ來たのが、正宗記によりて梁の普通元年とすれば、西曆五百二十年で、彼が支那に留まつたのは九年にしか過ぎない。尙達磨の研究につきては、松本文三郎博士著「達磨」を參考すべし。此書には

「支那禪敎の由來」を併せ說けり、前掲境野氏の著書と共に歷史上より禪を研究するに助けとなるであらう。松本博士の書は明治四十四年、東京、圖書刊行會の發行である

二祖慧可は隋の開皇十三年示寂、（西、五九三）、壽百七。
三祖僧璨は隋の大業二年示寂、（西、六〇六）、壽欠。
四祖道信は唐の永徽二年示寂、（西、六五一）、壽七十二。
五祖弘忍は唐の高宗上元二年示寂、（西、六七五）、壽七十四。
六祖慧能は唐の先元二年示寂、（西、七一三）、壽七十六。

六祖の示寂は大正五年を去ること實に一千二百三年。達磨の示寂を過ぐること百八十五年。

禪宗五家畧傳

五家分立の理由

禪宗のことを聞く人は、「五家七宗」と云ふ語を折ゝ耳にすることであらう。此篇は其語を說明し、五家の列傳をざつと、述べやうとするのである。五家の宗風の詳しいことにつきては實地の修行によりて明らめねばならぬ、到底文字の上で盡くし得べきでない。

五家とは臨濟、雲門、曹洞、潙仰、法眼の五つで、七宗とはこれに楊岐と黃龍とを加へて云ふのである。楊岐と黃龍とは臨濟門下の小區別であるから、七宗と云はずとも、五家だけで其中に一切の禪宗の分派を含むのである。五家の名を列ね始めたは宋の契嵩の「傳法正宗記」（西、千六十四年）に始まると云ふ（卷八末の評を見よ）。併し臨濟、曹洞など云うて其宗風の異を認められたは、ずつと其以前のことであらう。

法眼禪師の「宗門十規論」には既に四家の宗風を別別に論じてある。とに角、五家とか七宗とか云ふと、まづ吾儕の腦裡に浮んで來る問はかうである。本來禪なるものは、教外別傳であつて、直指人心、見性成佛を旨としてをるではないか、それに又宗派みたいな區分をして見なければならぬとは、少しく受取れぬ。理屈に訴へてこそ種種の議論も起り、見解もあるとであらうが、理智分別を超越した禪宗に分派を生ずること不思議ではないか。是は最もな疑問である。少しく予の意見を述べしめよ。

禪の宗旨其ものの上から言へば、固より直指人心で、此間に何等の擬議を容れ、見解を挾み、分別を生ずべき餘地はない。が、一たび此「人心」なるものを見徹して、それからこれを利他の上に働かせようとすれば、人人によりて相違がある。何ぞ五家七宗に止まらんや、人人悉く相異するのである。禪の分派は禪を得た人の數と正比例すると云うてよい。權兵衛の禪もあれば八太郎の禪もある。或は進んで猫の禪もある、犬の禪もある、山河草木の禪もあると云うて差支ない。して見ると、向上の禪には分派がないけれども向下の禪には重重無盡の差別があると云はなければならぬ。五家と云ふは、只それを大體の上から見て、宗匠の大人格を標準とし、その人の禪法の上に假りに分派を立てたに過ぎぬのである。

中峰和尚の山房夜話(上)にも次の如く說いてある、予の意見と同じい。原漢文を直譯すれば、「云ふ所の五家とは乃ち五家其人のことで、五家の其道を云ふのではない。佛祖授受の旨を目して傳燈となすことは人人の知つてる所ではないか。苟も傳燈の何の義たることを知るときは則ち其何のために五となるかを疑はぬのである。世間の燈を以て之を言ふなら、籠燈と云ふもあり、盞燈と云ふもあり、瑠璃燈と云ふもあり、蠟燭燈と云ふもあり、紙撚燈と云ふもある。その燈たるに於いては則ち一つであるが、これに附け加へられた器が不同である。しかも不同とは言ふけれども、何れも生死長夜の幽暗を破らぬものはないのである。これは今日の五家にのみおいて然りとすべきでない。昔し達磨の一燈が凡そ四傳して大醫に至りて則ち牛頭の一宗が出來た。

それから五傳の後には大滿となりて、則ち北秀の一宗が出來た。また六傳して曹溪に至れば、其下に青原、南嶽、荷澤が出た。此三人なるものは便ち自ら得て混すべきではない。此れは勢の然ら使むるところである。蓋し各宗の下が枝分派衍して、人物蕃昌してくると、乃ち分れないでおかうと思うても自ら分れてくる。今日の五家なるものは、乃ち南嶽と青原とより出たもので、此兩人の派が流れ〳〵て此五人となつた。その各各が奔匯の水の如くに溢れて巨浸となることを覺えなかつた。前の波、後の浪、各相待たずして、そして天を黏し、日を沃ひ、浩として邊涯を知らぬと云ふ勢となつた。是れを一目として觀るわけにはいかぬ、乃ち分たざるを得ないのである。或は謂ふ五家の分れたるは人の盛なるに止まるにあらず、就中各宗旨の同じからざる所があると。併し幻(即ち中峰和尚)の考ではかうである、同じからざるにあらず、特に大同にして小異なるだけである。大同と云ふのは、少室の燈に同じいところを云ひ、小異と云ふのは、乃ち語言機境の偶〻異なるのを言ふのである。渴仰の謹嚴なる、曹洞の細密なる、臨濟の痛快なる、雲門の高古なる、法眼の簡明なる、各其の天性に出てをる。しかも父子の間には故歩を失はぬ、語言機境相蹈習するに似たものがある。要するに皆然るを期せずして然るのである。もし其當時の宗師にして苟も只異なることを尙んで、さうして自ら一家の傳をなさんと思ふたなら、其謬りに勝えぬこととなる。そんなことをやつてをつては、豈に佛祖照世の命燈を傳うるに堪へんや。然るに今日の禪徒は虛空を夾截せんとの妄見を起して互に相短長を爭はんとしてをる。かくては五宗の師も大寂定中において鼻を掩はぬわけに行かぬに決つてをる。」

五家と云ふも、七宗と云ふも、法の上から見れば何にも相異はないのであるが、その人格が相違するもの故、さうしてその相違の特點が非常に水際立つて目立つもの故宗派なるものが自ら出て來たものである。されば五家に限らず、七宗に限らず、禪者の數だけ、宗派の數があるものとしてよいのである。故に「傳法正宗記」の著者もさう言うてをる、「正宗は大鑒に至りて傳既に廣く、而して學者各其師の說を務めるや

うになつた。それから天下に異を生じて、何れも競うて自ら一家をなした。故に潙仰と云ふもの、曹洞と云ふもの、臨濟と云ふもの、雲門と云ふもの、法眼と云ふものがある。此んなものを數へ立てたら皆悉くすわけに行くまい。さうして現時は雲門、臨濟、法眼の三家が尤も盛んで、潙仰は已に熄み、曹洞は僅かに存し、緜緜然として、大旱の孤泉を引くが如きものである。然れどもその盛衰は法に強弱あるのではあるまい。蓋し後世の相承に人を得ると得ざるとによる外はないのである。書に云はずや、苟も其人にあらざれば道虛しく行はれずと。」

他の宗旨でもさうであるに相違ないが、特に禪の如き人格を中心としてをる宗旨には、その人物の色彩が直ちにその人の得た法の色彩となつてくる。今一つ例を擧ぐれば、支那から日本へ傳はつた臨濟禪にも二十四流あると云ふことであるが、つまり二十四流と云ふは二十四人の大宗匠があつたと云ふと同じことである。流派の相違と云ふは人格の相違に過ぎない。是は哲學の如き抽象的學問にありても、尙さうである、まして人々の箇的性格を其發足點とせる禪にありては、大にその然るを見ると云うてよい。もし其人の性格がさして著しい特色を帶びて居なかつたなら、さうして其特色が、又他に影響するほどでなかつたなら、其人の禪は別派を建立するだけの力のないものである。それで二十四流のうちで今日まで傳はつてをるのは大應國師の流である。大應、大燈、關山と、かうなつてをる。此關山國師は妙心寺の開山であるが、これが德川時代になりて白隱和尙によりて大に擧揚せられ復興せられた。今日の臨濟宗は白隱宗であると云うてよい。何となれば當時禪門の宗匠として一方に割據するもの何れも白隱下ならざるはないからである。さうして此白隱下に二派が出た、卓州と隱山とである。それ故今日の臨濟禪は卓州下ならざれば、隱山下であると云はねばならぬ。もしまた之を仔細にわけるなら、儀山下、滴水下、禾山下、獨園下、洪川下などとなるなとであらう。禪の宗旨には派なるものはないけれども、これを擧揚する人物に性格の相異があつて、自然に蘭の香ひ、菊の香ひ、梅の香ひ、木犀の香ひなどと分れてくる。

一のものが二つに、三つに四つに岐れると云ふのが、進化の法則であると見える。

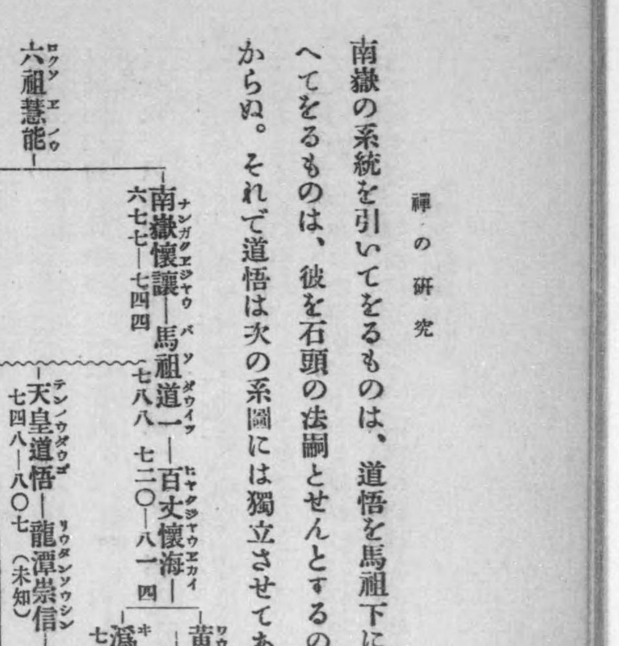
「五宗原」（明の法藏著）と云ふ書物の總結に分派の理由を述べてある。「得心於自、得法於師、師有人法之分、心有本別之異。根本智者、自悟徹頭徹尾者是。差別智者、自悟之後、曲盡師法、以透無量法門者是。良以師必因人、人貴法妙、分宗列派、毫髮不爽。故傳法之源流、非獨以人爲源流也。」これによりて見れば、自心に徹底する根本智よりすれば、禪に分派のあるべき餘地はないが、根本智が差別界に現はれて働くことになると、そこに千萬無量の法門が出て來る。啻に宗師の爲人性格より生ずる差あるのみならず、差別智そのものの性質が分派を餘儀なくさせるのである。まづ此の如き意見である。併しこれも詮じつむれば、禪者箇箇の性格に相違があつて、この相違が差別界に接して、さま〳〵に働くやうになるから、自然に各自に得意〳〵の處が出て來る、さうしてこの得意の處が各派の特色となるにすぎぬのである。

五家の宗旨を說きたる書物のうちに、「人天眼目」と云ふがある。これは讀者の必知りおくべき書物である。宋の晦巖智昭が編集したもので、淳熙十五年、即ち西暦千百八十八年に刊行された。此外で、清朝の順治二十七年（西暦千六百五十七年）に三山燈來の撰に係る「五家宗旨纂要」三卷、明の崇禎元年（西暦千六百二十八年）に萬峰沙門法藏の著はした「五宗原」一卷、それから日本では虎關師錄の「五家辨」一卷、東嶺和尙の「五家參詳要路」一卷がある。法眼禪師の「宗門十規論」、對答第四、及び天如和尙語錄中の「宗乘要義」なども一讀してよいか。此篇は一一の宗派につき細說せぬ、只宗祖の畧傳と其宗風一般とを紹介する。詳しくは上記の書物を參考し、尙「五燈會元」、「景德傳燈錄」などをも調ぶべきである。

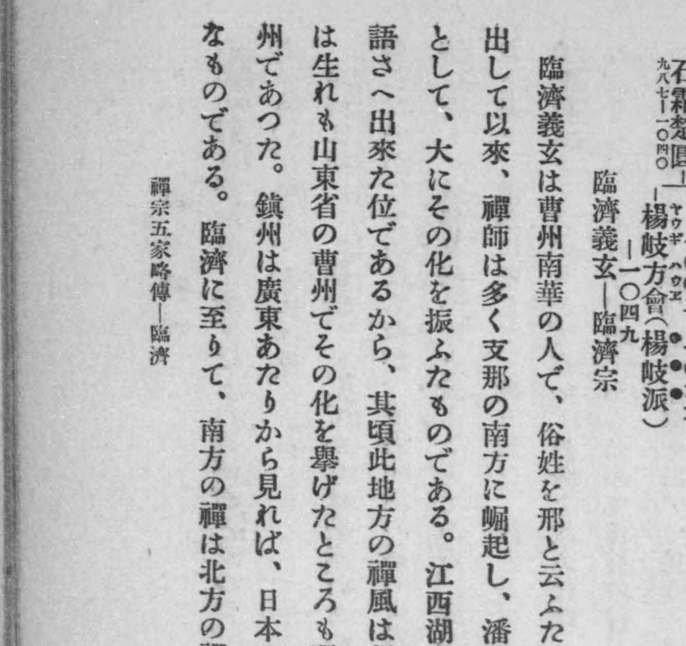
五家の系統

五家の系統は次の如くである。處が、ここに古來からの議論があつて、天皇（或は主）道悟は馬祖下であるとも云ひ、石頭下であるとも云うて、今に一定してをらぬ。

南嶽の系統を引いてをるものは、道悟を馬祖下にせんとする傾きあり、青原の流を傳へてをるものは、彼を石頭の法嗣とせんとするのである。何れが何れか、著者にはわからぬ。それで道悟は次の系圖には獨立させてある。



「七宗」と云ふ時は楊岐と黃龍とを加へる、此兩者は共に臨濟系統に屬する、宋朝にりて發展したのである。現時日本に於ける臨濟禪は悉く楊岐の流を汲んでをる。



臨濟義玄は曹州南華の人で、俗姓を邢と云ふた。六祖慧能が始めて禪を廣東に唱へ出して以來、禪師は多く支那の南方に崛起し、潘陽湖附近、即ち現時の南昌府を中心として、大にその化を振ふたものである。江西湖南の文字からして「江湖」と云ふ熱語さへ出來た位であるから、其頃此地方の禪風は想ひやられるのである。然るに臨濟は生れも山東省の曹州でその化を擧げたところも現時の正定府即ち滹陀河の畔りの鎭州であつた。鎭州は廣東あたりから見れば、日本の琉球や臺灣から仙臺へ行つたやうなものである。臨濟に至りて、南方の禪は北方の禪となつた。半熱帶的氣風を帶びた

六祖の禪は寒冽骨を透すほどの臨濟禪となつた。氣候や地理の關係も禪風の上に讀まれるものではないかしらん。

臨濟は幼にして穎悟、長じてからは親孝行ものとの名が高かつた。いくつの年に落髮したのかは分明ならぬが、僧侶生活の始めに當りては、專ら教論の研究に從事し、特に精しく戒律を修めたと云ふことである。處が、それで安心の途が見出されなかつたと見え、俄かに嘆じて、教と云ひ、律と云ひ、何れも世を救ふの醫方であつて、自らを救ふところのものでない。自分を救ふには、どうしてもまづ教外別傳の旨を究めねばならぬ。それが出來てから始めて種種の醫方も役に立つはずであると思ふた。

其頃の禪者が入禪以前の生涯を調べて見ると、大抵講教をまづやつてをるやうに見える。これが普通の順序であると思はれる。文字に對しての不滿足は始めから出ない、大抵のものは文字は道を載せてをる器(うつは)であるからと云ふので、まづ之を修めんとする。しかし修めて見ると物足らぬ處が發見せらる。フワウストが學窓での歎息は少し心がけあるものの皆實際に經驗する所。此處でわからぬと道うて死ぬる弱虫もあるけれど、禹門三級を登りつくす赤梢鯉もある。併し迷はずんば悟らずで、此最初の迷ひ、疑ひ、悶へが、大に面白のである。古來の禪者の心的歴史が細かに分明せぬもの故、此間の消息を文字の上、歴史の中から探り出すわけに行かぬ、但一隻眼を具へて、紙背に徹し、句章の間に讀まなければならぬ。

臨濟はまづ南の方筠州黄蘗山にやつて來て希運禪師の會下に投じた。黄蘗山と云ふは現時は瑞州に在る、その頃は禪宗の中心點をなしてをつた。臨濟はここで衆に隨ひて參禪辨道を懈らなかつたと思ふ。今日では、獨參と云ひ、入室と云ふものがあつて、自分に授かつた公案に對して、何か見解を呈することとなつてをるが、唐の始め頃にはこんな組織がなかつた。一般の修行の形式は、禪師なるものが時時に法堂に出ててなにか宗旨の話をやる、すると大衆は自己の疑問を提げ來りて、禪師の和尚に質す。さうすると和尚は禪の立場からして之に答へる。くど〳〵しく教理の説明などをせぬ、

直ちに宗旨の極意を赤裸裸に擧揚する。問者は之に由りて入道の枝折を得ることもあり、得ないで益〻深く疑ふこともある。何れにしても、其人人の根機と熱心とにより、何かの稗益を得て、警發の機に觸れるやうに進んで行く。昔しはこんな風で公案を看ると云ふことはなかつた。公案となるべき歴史的話頭も餘りなかつたのである。それで修行者は和尚の法話によりて一人して自己流の坐禪工夫をしてをつたものと察せられる。何をどう疑うて、どう質問を發してよいかさへ判決のつかぬものもあつたに相違ない。「なんだか禪はわからぬものである、和尚の指示する處何と手を下してよいか、決着がつかぬ。そんならそれで構わずにおかうかと思ふが、何だか安心が出來ぬやうである。とに角心が變になつて、落ちつき處がなく、胸裡頗る悶を覺ゆる。これはどうしたものか」と、まづこんな風に迷ひこんで居つたものが可なりあつたに相違ない。臨濟も黄蘗の會下でこんな風に苦しんでをつた一人であつたろ。「どこを、どう、つかへるものか」と工夫慘憺を極むること玆に三年、倦まず、撓まず、苦修を重ねた。遂に考へることもなく尋ねることもなく、言はばぼんやりとするやうになつて仕舞つた。このぼんやりは普通手持無沙汰のぼんやりではなくして、是から霹靂一聲天地を驚倒せんとするの機を藏くしてをるところのぼんやりであつた。

睦州首座と云ふのが其頃黄蘗會下の第一位を勤めてをつたが、臨濟の樣子を看察して、撥轉の機將に熟せんとするのを知り、臨濟に勸めて、何か和尚に質問せよと曰ふた。所が、臨濟は、「何も質疑がない、ないではないやうであるが、さて何とこれを言語の上に發してよいかわからん、問を敎へてくれ」と答へた。此一語でもつて臨濟の工夫がどこまで進捗してをつたかが瞭然としてをる。そんなら睦州は「如何なるか是れ佛法的的の大意」と問へと敎へてくれた。臨濟其通りに和尚の前へ出てやると、和尚は何も言はずに棒を以て臨濟をたたきつけた。なんの事か少しも解せぬ。臨濟は失望して退出した。第一座の睦州に會うて其ことを話すと、もう一遍「佛法の大意」と云うて尋ねて見いと言はれた。其通りやつたら復たたかれた。彼は依然として吳下の

舊阿蒙である。已むを得ず「不可解」の報告を第一座に返へすと、第一座は更に「今一遍問へ、氣を挫くに及ばぬ」と激勵してくれた。臨濟は道を求むるに急にして、また道を信ずること深い、それで何等の自己の分別思慮を本としたる見解を抱くことをしなかつた。先進者の勸めてくれるまに三たび虎鬚をひねつた。ところが依然として「便ち打つ」と云ふ應答。こちらでも依然として最初の「不可解」。どうしても機緣稱はずとでも云はうか、臨濟はどこか外で修行して見たいと思ふた。

そこで臨濟は睦州の計ひと黃蘗の指圖とで、隣山の大愚と云ふ禪匠の處を尋ねることにした。いよ〳〵此和尚の處へつくと、彼は「お前どこから來た」と尋ねる。「黃蘗の處から來ました」と返事すると、「黃蘗はなんと言ふた」ときかれる。臨濟曰ふ、「私は三たび佛法的的の大意を尋ねて、三たびとも打たれました。が、私に何の過失があつたのですか、如何でござる。」さうすると、大愚は、「黃蘗も大分年とつたか、そんなにお前のために老婆心切を盡くして到らざるところなしと云ふほどである。それにお前は私の處までやつて來て自分に過失があるか、ないかと尋ねる。お前も少しどうかしてをるのだな」とやつたら、臨濟言下に大悟した。さうして聲高かに「黃蘗の佛法などと云うて、さう大したこともないのぢやな」と叫び出した。「便ち打つ」の意義に徹底したのである、從來の疑團一時に氷釋した。併し大愚はまだ許さぬ、どこまでも人を殺したら血を見ねばならぬと云ふ意氣込、直ちに臨濟をつかまへて、「此小便たれ小僧め、さきには過失があるかないかと言ひよつたが、今は什麼の道理を見て、黃蘗の佛法に多子なしなどと云ふ、高言三昧、さあ道へ〳〵」と責めつけた。臨濟何も言はずに拳を以て大愚の脅下を築くこと三たびした。大愚これを見て臨濟の手許を充分に知つたから、其手を放して、「お前の師匠は黃蘗である、わが關したとではないさあ元の山へ歸れ〳〵」と曰ふた。

臨濟また黃蘗山へ戻つて來ると、和尚はこれを見て、「お前のやうに昨日去つかと思ふと今日また戻つてくる、來來去去何時修業が出來ると思ふか、こののらくら漢め」

と叱りつけた。黄檗がこんなに言ふのは、畢竟ずるに臨濟を勸せんとするのである。苟も禪匠ともあらんには、臨濟が這回の樣子を見て直ちに其心底を見屆け得べきである。今更どうした、かうしたと問ふに及ばぬ。それをかく言うて見るのは、臨濟の悟を試んとするのであらう。臨濟は素直に大愚の處へ行つて、そこでの出來事を話しすると、黄檗は本音を現はした、「大愚のお饒舌め、何をくど〳〵と道ふ、彼奴ここへ來たら一棒をくらはしてやろう」と。臨濟は之を聞くや否や、「あの和尚のくるのを待つまでもない、即今直ちにくらはしたが好い」と曰ひながら、一掌を黄檗に與へた。これが臨濟禪の始まりである。さきに三度佛法的的の大意を尋ねて三度打たれた臨濟と今この面目一新の臨濟とを比較して見ると、更に同人の感じがせぬほどである。

併し臨濟の修行は、是だけで終はつたのではない。彼は是からも密かに内觀と實踐を懈らなかつたに相違ないのである。それから彼は黄檗の處のみにをらず、諸方を遊歷して、禪匠の門を叩き色〻と商量をやつた。かく四方を行脚するは既に其頃の慣習であつたと見える。昔し印度に於ける僧侶の遊歷は法を宣傳するためであつたが、支那における禪僧の行脚は師を求め道を窮むるためとなつた。汾陽善昭禪師に「行脚歌」と云ふのがある、「發レ志辭レ親、意欲ニ何能一……唯有ニ參尋一別無レ路、苦ニ身心一歷ニ山水一、白眉作レ伴爲ニ參禮一冒レ雪衝レ霜不レ避レ寒……只緣ニ心地未ニ安然一」と。支那の如き國においては、此行脚がよほど心身鍛練の上、智識開發の上において利益あつたものと思はるる。

ある日臨濟はふと夏中に黄檗のところへ戻つてきた。黄檗がお經を讀んでをるのを見て、臨濟は「此老僧くだらぬことをやつてをる」と思うて、其處に滯留すること暫らくして復たそこを辭し去らんとした。そしたら黄檗云はく、「お前は夏を破つて來て夏を終へずに去つて仕舞ふとは、甚だ無暗なことである」と。臨濟云ふ、「某甲は只一寸來て和尚樣の御機嫌を窺ふたに過ぎぬのであります」と。すると黄檗は彼を打つて逐ひ出して終つた。臨濟は其まま出て行つたが、どうもこれが氣にかかつてなら

ぬので、復戻つて來て夏の濟ひまで黄蘗の處で坐禪した。さうして大に考へこんだ。

またふと一日和尚の前へ出て來て、お別れだと云うてお辭義をした。黄蘗、「何處へ行く」。臨濟、「河南でなければ河北、どこへでも足の向ふ所。」黄蘗打つた。すると臨濟は和尚を約住して一掌を與へた。これが餘程黄蘗の氣に入つたと見えて、和尚は大笑した。さうして侍者をして百丈先師の禪版と机案とを持ち來たらしめて、これを臨濟に與へて印可證明した。固より臨濟はそんなくだらぬものは火に燒いて終ふと力んだけれど、和尚は「まあ、そんなこと云はずに持つて行け、人の彼是言ふのを豫防するにもよからう」と云うて、彼を說伏した。

これから臨濟は尙暫らく行脚をつづけて、遂に河北の鎭州城外にある臨濟院の住持となり、そこで三聖慧然、興化存獎、寶壽沼、灌溪老閑など云ふ人人を鍛へ上げ、唐の咸通七年（或は八年とも云ふ）に寂を示した。法語と機緣などは臨濟錄に殘つてをる。「景德傳燈錄」卷十二、「五燈會元」卷十一、「光明藏」卷下、「五家正宗贊」第二卷、「釋氏稽古錄」第三、「歷代通載」第二十四などをも參考したらよい。

臨濟の宗旨は大機大用を發揚して、其機鋒の鋭きこと、正宗の刀を以て直ちに汝が胸を刺すが如きものであると云ふのが定評である。五祖山の法演は一僧が「如何なるか是れ臨濟下の事」と尋ぬるに對して、「五逆雷を開く」と答へた。五逆とは五逆を犯した大罪人と云ふ意味である。此の如き大罪人なれば雷鳴を聞きて氣も心もそらになるは必定である。臨濟の禪は丁度こんな趣きがあると云ふのが法演禪師の評である。或は臨濟を將軍に比するものもある。三軍を叱咤する勢があるからであらう。「人天眼目」の著者が「臨濟の門庭」に對する評語を紹介する。

「臨濟宗旨、大機大用、脫羅籠出窠臼、虎驟龍奔、星馳電激、轉天關斡地軸、負衝天意氣用格外提持卷舒擒縱、殺活自在、是故示三玄、三要、四賓主、四料揀、金剛王寶劍、踞地獅子、探竿影草、一喝不作一喝用、一喝分賓主、照用一時行、」云云。

尙三玄三要以下の術語に對しては「臨濟錄」を看たらよからう。一一說明するは此篇の目的ではない。

雲門文偃——雲門宗

雲門宗の開山は文偃禪師である。雲門と云ひ、臨濟と云ひ、潙山、仰山と云ひ、また洞山と云ふ、何れも其人の住持してをつた寺院か又は山の名である。雲門山光泰院は廣東省の韶州に在る。六祖慧能の化を開いたと同じ地方である、雲門文偃はここで其宗旨を大に擧揚した。併し生れは姑蘇の嘉興であつたと云ふから、現時の上海を少し南に行つた處である。姓は張氏、支那に隨分ある名字である。何歲で出家したのか分明でないが、受業師は禪僧ではなくて志澄といふ律專門の和尙であつた。雲門は臨濟より百年ほど遲れて死んでをる人であるが、其始は矢張り律文の研究をやつたものと見える。えらい人は大抵幼にして英邁とか敏慧とか云ふのであるが、雲門も其選には洩れず、「五燈會元」には「敏質生知、慧辯天縱」と書いてある。この慧辯天縱には意味がある。雲門は古から言句の妙を得てをるとの定評があるので、生來の長處を大に禪の上に發揮したものと見える。いくら利巧な稟性でも心地の修行はまた別物であるから、「敏質生知」の雲門も己事未だ明かならざるには、心を惱ました。律の研究だけでは如何にも滿足が出來ず、志を決して禪を修めんものと、程遠からぬ睦州の陳尊宿の處へ來て誠を拔じた。陳尊宿は道明（或は道蹤）と云うて、彼の黃蘗の下に在り大に臨濟を扶掖してやつた和尙である。睦州の觀音院に隱栖し、蒲鞋を織つて母を養うたと云ふほど孝行の誠をつくした人である。學問も出來、操行も謹嚴な上に、宗旨を擧するに當りては、詞語峻險を極め、淺機の徒は近傍することを得なかつた。雲門は此惡辣なる和尙を見込んで修行せんものと思ふた。

雲門が尋ねて來るのを見て、睦州は自分の所の門を閉ぢてしまつた。雲門はきつと「妙なことをやる和尙である、人の來るのを見て態と戸を締めるとは」と思ふたであらう。勿論此時雲門に宗旨の眼があれば何とか挨拶の仕樣もあつたに相違ない、併し今

日それを望むべきでない、これから修行を始めやうとするのである。そこで彼は門を叩いた。内から聲がする、「誰だ」と云ふ。雲、「嘉興の文偃と申すのでござる。」睦、「何の用で來た。」雲、「自心の根底がまだ充分に明らめられんで、それを正したいものと思ひ、やつて參りました。何とか指示を仰きたい。」さうすると睦州は門を開いて一寸と雲門を見て、又直ぐにそれを締めてしまつた。これが睦州の宗旨上の指示であつたと見える。併し雲門には何のことか全く雲を攫むやうである。ここで己事を究明するも何にもあつたものでない。止むを得ずすご〳〵歸つていつた。さうして次の日またやつて來た。昨日と同じく締め出しをくはされる。懲りずに次の日また睦州の門を叩く。また門を開いた。「此機失ふべからず」と思ひ、決然として其開けたる處より闖入した。すると睦州は雲門を擒住して、「さあ道へ〳〵」とつめかけた。思ひがけないので、雲門擬議した、一寸返事につまりて、まご〳〵したのである。すると睦州は彼を門外に押し出しながら「秦時の轆轤鑽」と言ひ放つたが、其の門の締めやうが少し早かつたので、雲門の片足は戸にて挫かれた。「あいた〳〵」とやると同時に睦州の用處に徹見し、「なるほど」と悟つた。

これから雲門は睦州の勸めに任せて、福州の象骨山に庵居してをつた雪峰義存（八二二—九〇八）の許へいつて修行をつゞけることにした。此雪峰と云ふは、巖頭欽山と共に諸方に行脚して宗旨の研鑽に一身を委ねた人である。三たび投子に至り、九たび洞山に上ると云ふほど、熱心に道を求めた。其上陰德を積むことを專らとし常に杓子をもつて四方を廻つたとのことである。其意は典座即ち賄方を引受けるのである。賄方は普通人の好まぬ役位であつて、所謂勞して功なき勤めなれば、「椽の下の力持ち」をやらねばならぬことが澤山ある。雪峰は進んで此苦役に當つた。こんな人柄であるから、出世してからも仲々大勢の弟子があつたと書いてある。雲門は今此人を賴まんと更に南の方福州に往つた。

福州の雪峰莊へくると、そこにまた一人の禪僧がをつて、同じく象骨山へ往くと云

ふので、雲門は此僧をして先づ雪峰和尚の手元を見やうとした。即ち彼は此雲水の僧に云ふやう、「上座よ、わがために一則の因縁を以てお山の和尚様に問うて見てくれんか。併しそれは別人の語であるなどと云ふてはならぬ。自分のものとして試みてくれ」と。雲水は同意を表したから、雲門はかう曰ふた、「和尚が上堂して大衆が集まると、直に其處へ出て、腕を握りて地に立つたまま、『この老和尚、頭の上の鐵枷をなぜに脱し去らぬか』と道うて見い」と。雲水は教へられたままに、和尚の上堂と共に其通りにやると、雪峯はすかさず禪床から下りて來て、この雲水の胸倉をひつつかんで「さあ道へ〳〵」とやつた。雲水はこれ以上を教へられて居ないので、どうして善いかと大にまごついた。すると雪峯は雲水をつき放して、「今やつたのは貴様自身の言葉ではあるまい」と叱なめた。明眼の宗匠の前へ出ては五臟六腑をみな看透されるので、ごまかしをやるわけに行かぬ。併し雲水はさきの誡があるので、どこまでも、「是れは私の言葉である」とやつたら、雪峯はそんな虚誕をつく奴は將來の誡に佛罰を與へてやらんとて、侍者をして繩と棒とを持ち來たらしめんとした。雲水はもはや是迄と思うて、前後終始を白狀した。そしたら雪峯は大衆に向ひて、「門前の村には五百人の善知識がきて居るから迎ひにいつてこい」と云ふた。次日雲門が山に上つてくると、雪峰は一見して、直ちに「どうしたら此んな處へ出てこれるか」と云ふ、「因甚麼得到與麼地」と會元には書いてある。そしたら雲門は何も云はずに頭を垂れた。（正宗贊には師以手拭目趂出と書いてある）。雪峯はこれを奇として雲門を自分の弟子に加へた。雲門はこれから宗旨の溫研益〻穩密になつて、遂には宗印を授けられ、雪峰の法を嗣いだと云ふことである。

韶州の靈樹へ出世する前までは、尚四方を遍歴して、殊軌を覈窮したが、雲門の鋒辯險絶にして、其名江湖に盛傳せられた。靈樹の如敏禪師の遷化したとき、廣主の劉王は師を賴みて其跡を繼がしめた。併しそれより間もなくして又劉王の命に任せて靈樹を去り、韶陽の雲門山に遷り、廢址を再興し、大に堂宇を新にして、雲門一流の禪

道を唱へた。彼に師事するもの常に千人を超え、劉王も殊に尊崇の念厚く、師を宮中に迎へて法要を聞いた。雲門山光泰寺に止まること三十年の久しきに及び、遂に西暦九百四十九年、五代の天地尚未だ統一に飯せざるとき遷化し去つた。「雲門廣錄」三卷は藏經中、「古尊宿錄」の第十五卷より第十八卷までに收めてある。平生の機緣語句悉くここに載せらる。

尚精しく文偃禪師の行業を調べんと思ふ人は次の書物を見たらよい。上來の所述と多少出入したる傳說も見出さるるであらう。「景德傳燈錄」十九卷、「歷代通載」第二十五卷、「禪林僧寶傳」第二卷、「五燈會元」第十五卷、「正宗贊」第十五卷、「雲門廣錄」第三卷、「釋氏稽古錄」第三卷等參考。

雲門の宗風は語句を出すこと頗る高古にして幽玄、迥かに尋常を出づる所に在りと云ふのが定評である。さきに臨濟を將軍に比したが、雲門は天子と云はれてをる、如何にも九重雲深くして其奧の見透され難き樣子があるからであらう。五祖山の法演は「如何なるか是れ雲門の宗風」ときかれて、「紅旗閃爍」と答へた。或は「千波影裡に紅旗を卓つ」とも評してある。或は「嶮峻なる孤峯頂上において、鬱鬱なる森の陰から、翩翻たる錦旗がひら〳〵と見えてをるやうなものである、さうして其旗の何たるやも看極め難きのみならず、壁立萬仞の孤峯なれば爪もたたねば寄りもつかれぬ」と評されてある。大抵これにて雲門宗の樣子がわかると思ふ。「人天眼目」の評語は左の如しである。

「雲門宗風孤危聳峻、人難湊泊、非上上根執能窺其彷彿哉、評雲門語句雖有截流之機、且無隨波之意、法門雖殊、理歸一致、」云云。

洞山良价—曹洞宗

曹洞宗の開山を洞山良价と云ふ、洞山は江西の瑞州に在る、黃蘗山も此に在る、此邊一帶は支那における禪宗の中心で、唐宋時代の名僧は多く江西湖南に崛起したものである。良价生れは會稽で、愈氏を姓となすとあるゆゑ、故鄉は昔の越今の紹興あた

りであつた。唐の憲宗、元和二年（西、八百七年）に生る。幼にしてお寺へでも往つて勉學したものと見え、師に就いて般若心經を念誦したが、其中に「無眼耳鼻舌身意」と云へる句があるので、これに不審を起した。自ら手を以てその面を捫でながら師匠に尋ねた、「私には眼耳鼻舌等がありますが、此御經にはそんなものはないと書いてある。これは如何なるわけでありますか。私には不了解である。」師なる人は之を聞いて、此子侮るべからずと思ひ、他に有德の人を尋ねて、其哲學的思索心を滿足せしめんと決心した。此師匠仲々自ら知り他を知るの明があつたに相違ない。そでなければ普通の人ならこんな子供の研究心などは頭から押へつけて仕舞ふたに相違ない。

洞山は其師の命のまゝに南の方婺州の五曳山に往つて靈默禪師を尋ねて、そこで剃髮した。年二十一にして魏の嵩山に詣りて戒を受け、それから四方へ遊學に出掛けた。まづ初めに掛錫した處は池州の南泉、そこで普願禪師に就いて禪要を聞いた。勿論これまでにも既に經論を讀み坐禪をも修めたものに相違なからうが、まだ入頭の處がなかつた、五里霧中に彷徨してをつたのであらう。敎理において多少か明らめた處があつたにしても、禪の宗旨に至りてはまだ手を着けてなかつたのであらう。南泉の處にをるとき、ある日南泉の師匠の馬祖道一の忌日に値つたので、南泉は齋を供へて法要を修めんとて、衆を集めて問答をやつた。其時南泉問うて曰はく、「馬祖の齋を設くるのであるが、馬祖は供養を受くるため此處へ還つて來るのであらうか。」かく問はれたけれども、誰れも答へるものがなかつた。南泉には澤山大衆も居たであらうに誰一人これに答へなかつたのはお可笑しい。どこへ行つても無眼子の徒のみ多いものと見える。其時洞山は衆を出でゝ「伴あるを俟つて即ち來らん」と應じた。また一見識である、それで南泉は「此子は後輩のものであるが、雕琢を加へたなら他日人物となるであらう」と曰ふた。洞山仲々だまつてをらぬ、「和尚さまは、いらざる世話やきぢや、良を壓へつけて却て賤となすやうなことを云はれる」とやつた。

その後洞山は南泉を去りて、西の方潭州の大潙山に到り、靈祐禪師の會下に投じ、

ここで無情說法の眞義を極めんとした。無情說法の話は南陽の慧忠國師より始まると云ふのであるが、其意は、說法は有情即ち意識をもつてをるものに限らぬ、無情の木石瓦礫と雖、尙之をよくすと云ふ處に在る。分別上の問題としては、哲學上からも宗敎上からも容易ならぬ。「われに眼耳鼻舌身あり、經文は何として無眼耳鼻舌身を說くか」と疑ひ始めたる洞山は、必然の論理として無情說法を疑ふことになつた。近代の青年は、自己を覺とるとか、自己に醒めるとか、何とか云ふ形式にて人生を疑ひ、天地を疑ふやうになるが、洞山は無情說法の話において、天地未分以前よりの疑團に逢著した。かく一旦逢着したからには、どうしても解決がつかねばならぬ、解決がつかねば其人は死んでをるのである。無情說法の話は五燈會元（第十三）によると次の如くである。少し長いけれども參考のために紹介しよう。

僧あり、慧忠國師の處へ來て問ふ、「如何なるか是れ古佛の心。」

志、「墻壁瓦礫。」

僧、「墻壁瓦礫豈に是れ無情にあらずや。」

忠、「是なり。」

僧、「還つて說法を解すや、否や。」

忠、「常說、熾然說、無間歇。」

僧、「某甲何しとてか聞かざる。」

忠、「汝自ら聞かず他の聞くものを妨ぐべからず。」

僧、「未審、何人か聞くことを得たる。」

忠、「諸聖聞くことを得たり。」

僧、「和尙還つて聞くや否や。」

忠、「我聞かず。」

僧、「和尙既に聞かず、爭でか無情說法を解することを知るべき。」

忠、「賴ひに我聞かず。我若し聞かば即ち諸聖に齊しからん、汝即ち敎說法を聞か

さるなり。」

僧、「恁麼ならば則ち衆生分なくして去らん。」

忠、「我は衆生のために說く諸聖のために說かず。」

僧、「衆生聞いて後如何。」

忠、「即非衆生。」

僧、「無情說法、何の典敎にか據る。」

忠、「灼然、言、典を該ねざれば君子の談にあらず。汝豈に見ずや、華嚴經に曰ふ、

剎說、衆生說、三世一切說と。」

洞山は此一則の因緣につきて疑が解けなかつたので、溈山に尋ねると、溈山は「無情說法は自分のところにもあるが、祇〻其人を得ること罕である」と云ふた。そこで洞山は請益すると、溈山は拂子を竪てて、さうして「わかるか」と云ふた。洞山はわからぬ。何とか說明して聞かしてくれと賴んだ。溈山は頗る老婆である、否、隨分もつて廻はつたものである、「父母所生の口では汝のために說き得ぬ」と答へた。これは言語道斷、心行所滅で、到底も口から傳へ、意識で分別すべきものではない、自家の發明を俟つと云ふのである。そこで溈山は洞山に敎へて百丈で自分と同窓であつた雲巖の曇晟のところへ行けと云はれた。丁度臨濟が黃蘗の下で打發出來ず、大愚まで迷うて行つたと同じである。

洞山は雲巖に來て、溈山との問答を繰り返し、更に問ひて曰ふ、「無情說法は何人か聞くことを得たる。」巖、「無情聞くことを得。」山、「和尙聞くや否や。」巖、「我もし聞かば、汝わが說法をきかず。」山、「某甲、何として聞かざる。」巖ここで拂子を竪てた、さうして「聞いたか」と曰ふた。洞山依然として默阿彌である。「聞かぬ」と云ふ。巖「我說法すら汝尙ほ聞かず、豈に況んや無情說法をや。」山、「無情說法は何の典經に該るか。」巖、「豈に見ずや、彌陀經に云ふ、水鳥樹林悉皆念佛念法と。」洞山ここに至りて始めて氣がついた。一偈を作つた。

「也大奇、也大奇、無情說法不思議、若將耳聽終難會、眼處聞時方得知。」

是で一段ついた譯であるが、まだ充分と云ふことではない、「箇事を承當せんには大に須らく審細にすべし」と雲巖が誡めたやうに、禪の修行は入れば入るほど深くなるのである。それ故に小知小見を恃みて徒らに眞を批判すべきでない。何事でもさうであるとは思ふが、特に心地の修行において其然るを見ることを予は固く信じて疑はぬのである。洞山は其後水をわたるに當り自分の影のうつるのを見て、また啓發するところがあつた。其時の偈は「洞山過水悟道の偈」として有名なものである、左に、

「切忌從レ他覓、迢迢與レ我疎、我今獨自往、處處得レ逢レ渠、渠今正是レ我、我今不レ是レ渠、應レ須與麽會、方始契レ如如。」

唐の大中の末年に良价は新豐山において衆を集め化を行ふた、其時に「新豐吟」と題して七言三十四句より成り立つ韻文がある。「寶鏡三昧」及び、「玄中銘」と共に洞山の宗旨を說いたものである。其後豫章高安の洞山に遷り、そこで盛んに五位の說を唱へて來機を接した。五位とは正中偏、偏中正、正中來、偏中正、兼中到の五つを云ふ。正は平等、偏は差別なり。法理の關係、修行の歷程を示したのである。此事につき精しきを知らんと思はゞ「五位顯訣」、「五位旨訣」、「洞山古徹」などの諸書を見たらよい。唐の咸通十年(西、八百六十九年)端然として坐ながら寂を示した、年六十三。その言行を集めたるものを「洞山錄」と云ふ。尙「五燈會元」第十三卷、「景德傳燈錄」第十五卷、「正宗贊」第三卷等をも見よ。(「林間錄」の下卷に洞山の母に關した記事がある、參考してよい。)

曹洞宗と云うて洞山宗と云はぬは、どんな理由があつたのか分明ならぬが、曹洞の曹は、洞山の弟子に曹山と云ふのがあつて、其人の一字を取つて洞山の洞と併せて曹洞の熟語を作つたのである。猶ほ潙山と仰山とを併せて潙仰としたやうなものである。なぜ洞曹と云はずに曹洞と云ふのは口調がよいからのことと思ふ。曹溪(六祖開宗の地)の曹をとつたと云ふ說もあるけれど、五位の說が充分の發展をなすやうにな

つたは、洞山これを唱へ出して曹山之に和したから、愈〻反響を生じたので、それから曹洞宗の熟語が出來たものであらう。曹洞の宗旨は綿密で、心地を明らめるのが、其特色である。綿密と云ふからには何となくはき〳〵せぬやうに思はるるは自然の感じであらう。されば法演は此宗を評して「馳レ書不レ到レ家」と云うてをる。臨濟のやうに痛處に針を下すと云ふことはない。或は「曹洞百姓」とさへ云はれる。これは賤しめた言葉ではなく、其宗風が如何にも實着で綿密であるのを譬へたのである。臨濟の宗風と相救うて、互に足らざるを補へば、最も妙であらう。「人天眼目」の評語を紹介すれば、

「曹洞宗者、家風細密、言行相應、隨レ機利レ物、就レ語接レ人、看二他來處一。」

又云ふ、「欲レ使二異苗蕃茂一、貴在レ深二固靈根一、若非二柴石野人一、爭見二新豐曲子一。」

潙山靈祐―潙仰宗

潙仰宗の開祖を潙山の靈祐禪師と云ふ、靈祐は福州長谿趙氏の子であると書いてあるから、矢張り支那の南方に生長した人である、唐の代宗、太曆六年、即ち西曆七百七十一年に生れた。十五歲にて出家し、本郡の法常律師につきて得度の式を行ふた。それから杭州の龍興寺へ行つて大乘小乘の教論を修め、三十三歲のとき江西に遊んで百丈山の懷海禪師の會下に投じた。他の祖師の傳記には年代のはつきりせぬが多いので、其人人の精神的生涯を窺ひかねるのもあるが、潙山の場合には二十三歲にして百丈に就いたと書いてあるので、此邊の消息がわかる。特に十五歲にして出家してから經論律をも研究したとあれば、安心の路をまづ文字の中に求めたものに相違ない。孔子は十五にして學に志すと云ふが、此學とは只物學び、物知りになると云ふのではなく、宗教上精神上において、大に要求するところがあつたと云ふ意味である。潙山が十五の出家も只出家したのではあるまい。さうして二十三まで教相の裡に沒頭して何とかして心靈上の諸問題に解決を與へやうと勉めたが、思ふやうに行かぬ。そこで百丈山に禪を修して文字言說以上の境地に一歩を進め入れんとしたのである。自然の徑

路を蹈んだものと云はねばならぬ。

百丈は潙山を一見して其尋常の雲水にあらざるを知つた。誠に深く道を求むる人は其様子において何處か凡庸と異なるところがあるものである。五百人、千人と澤山の大衆が居つても、本當のものは極めて少なかつたと見える。大抵の大山には大勢集まつてをつたやうに書いてあるが、果してこれが支那流の誇張的文字でないとすれば、凡物が餘程多かつたものと云うてよい。五百人もあれば、其中に一方の長者となるべきものは、少なくとも二十人三十人はあつても然るべしと思はれる、必ずしも、さう旨くは行かぬかも知らん。千人の中に二三人も出群の英傑があればそれで立派なものとしてよからう。とに角潙山は百丈のため末の見込あるものと知られたが、一日侍立の次、丈問ふ、「誰か。」山、「私でござる。」丈、「お前此爐の中を撥いて見い、火があるかどうか。」潙山、師の命のまゝに爐中を撥きまわして、さうして「火はござらぬ」と答へた。さうしたら百丈自ら起つて來て、爐中を猶深くほぢくつて、少許の火種を探りあて、之を火箸で取り出して、「お前は火がないと云ふたが、これはどうぢや」とやつた。潙山是において發悟すと書いてあるが、何か氣がついた處が有つたと見える。そこで自分が所解を陳べた。百丈は之に對して次の如き意見を加へた。

「お前の見解と云ふのは暫時の岐路にすぎないのである。經には、佛性の義を知らんと欲せば、時節因緣を觀ずべしと書いてある。其時節が來ると迷へるものの忽ち悟り、忘れたるを忽ち憶ひ出すやうに、佛性は元來己れの物であつて、他より來るものでないことを悟るのである。それ故に祖師の語に、悟り了れば未だ悟らざるときに同じ、心なければ法なしと云ふことがある。その心とは、虚妄とか、凡聖とか、善惡とか、是非とか云ふ妄心のことで、無心とは此の如き心のないのを云ふのである。本來の心には萬法元より自ら備はり足つてをるのである。此邊の消息をよく明らめておかねばならぬ。お前は今少しく省悟する處があつたと云ふが、これで以て足れりとせず、よく護持しもち行きて益〻進歩するところがなくてはならぬ。」

次日潙山は百丈と共に山へ行つて作務をやつた。作務とは禪堂生活の術語で、日日やる戸外の勞働を云ふのである。ここで一寸記しておくが、禪堂なるものが組織せられ、幾十幾百の雲水が一定の規矩の下に整然たる起居動作をなすやうになつたのは、百丈の創意によるのである。彼の時代までは禪寺と云ふものはなく、多くは律院を借りてそこに寄寓したものと見える。今日でも「百丈清規」なる書物が殘つて居て、禪堂生活の規定がちやんと示してある。かの有名な「一日作さざれば一日食はず」と云ふ言葉は、此百丈懷海禪師の口から出たのである。彼は啻に口の人ではない、これを實際に行うた人である。百丈山の主人として、多數の學者を統率して居ながら、日日の作務は自ら主となつてやつた、大衆自ら彼に隨はざるを得ないのである。さうして其作務中にも宗旨を擧揚することを忘れない。潙山との問答などを見てもわかる。其頃の禪は如何にも實地を專としてやつた。禪堂内にすわりこんでのみ行つたものではなかつた。其故學者も實地の力を得るに勉めて、禪を文字上、分別上の所得となすやうなことがなかつた。百丈の最後はいかにも立派であつた。「一日不作一日不食」の實行的模範を示して死んだ。百丈が愈〻老境に入つても、尙作具をとつて庭掃でも、薪刈りでもやらしては却て危ないと云ふほどになつて、ろくに仕事も出來ず、また仕事うとするから、弟子はこれを心配して、其作具を隱くしておく。和尙は何處を探がしてもないので、「吾は德がない、他の手を煩はして生を貪るわけに行かぬ」と云つて、食を忘れたと書いてある。如何にも眞率な宗教的態度が窺はれるではないか。吾等はひとへに慚死の外はない。

百丈の話はまづこれだけにして、其作務の次、彼は潙山に、「火をもつてこい」と云ふた。これ昨日の火か、どうか。山「もう將つて來て居ます。」丈、「どこにあるか。」潙山ここに於て一枝の柴を取りて、火でも吹くやうに、ぷつぷと二三度吹いて、これを百丈にわたした。これが潙山昨日の所得か。とに角百丈は實地の上に潙山を檢せんとしたものと見える。こんな鹽梅にして潙山は孜孜として禪道の研究を懈らなかつた。

丁度其頃は臨濟を仕上げた黄檗の希運禪師も百丈の會下にをつたのであるから、南方の佛法浩浩たりと云うてよかつたのである。

其後湖南から司馬頭陀なるものが百丈山へ來て、「近頃湖南を行脚してをると一つの山に尋ねあたつた、其名を大潙山と云ふ、山水の景勝當さに一千五百人の善知識の居處として然るべき處である。誰れかここへ來て禪院を興す人はあるまいか」と云ふた。百丈は「老僧そこに住したいものである」と望むだ。しかし頭陀はそれは出來ぬと云ふから、「何故であるか」と推して尋ぬると、「和尚は骨人であるが山は肉山である。たとひ和尚彼處に住しても、集るものは千に充たぬであらう」と頭陀は答へた。彼は人相學や風水學でもやつたものと見え、境地に相應した人物を得たいと思ふたのであらう。そしたら百丈は「わが會下で誰れか行けるものがあるかしらん」と云ふ。頭陀はとに角候補に立ち得べき人人を見んものと思ひて、其よしを告げると、百丈はまづ當時衆中に在りて第一座を占めてをる華林の覺なるものを呼び來らしめた。そこで頭陀は彼を試みんため、警咳一聲、行くこと數歩ならしめた。彼は慥かに人相家かなにかであつたものと見える。覺は此試驗に落第した。次ぎに呼ばれて出て來たのは典座賄方をやつてをつた靈祐其人であつた。頭陀は彼を一見すると直に其人なることを知つた、「大潙山の住持となるべきは此人の外に候はず」とやつた。それで百丈は其晩靈祐を呼んで、「老僧の緣は此山で、お前のは潙山に在るのだから、彼處に往つて大法を樹立して、大に禪を興してほしいものである。お前も今では一方の宗師であるから、後學を度することを怠るな」と、くれ〴〵も委囑した。

これを聞いた華林の覺は不平であつた、「某甲苟も當百丈山の第一座を占めて居ながら、典座が潙山に住持するやうになるのは、少し順序が違ふ」と云ふたので、懷海禪師はそんなら大衆が並んでをる面前で一轉語を下し得て、格外の機を出し得るものがあれば、それに潙山の住持を賴むことにせうと妥協案を出した。そこで百丈は戒法を守つてをる坊樣がいつも傍におく淨瓶を取出して、「喚んで淨瓶となすことを得ざ

れ、汝喚んで何となす」と問ふた。華林は答へて「喚んで木揆となすべからず」とやつた。木揆とは、木の切れつぱしか、棒か、杭か、或は木履だとも、木製の瓶だとも云ふ、何んでもよい、とに角、「これを喚んで木片とは云はれまい」とやつたのである。これは別にわるいことはないであらう。華林また一見識なきにあらずと云うてよい。併し百丈はこれでは許さなかつた。次ぎに潙山を呼んで其手段を試めすと、彼は何も言はずに其淨瓶をちよいと倒して出て行つて仕舞つた。百丈は思はず微笑を洩して「第一座は山子にまけた」と云ふた。これは叢林で有名な話である。

大潙山は湖南の潭州、即ち現時の長沙の附近に在る山である。人里を離れた、峭絶な山なので尋ねてくるものもない淋しい處、をるものは猿猱、食物の材料は橡栗、如何にも仙人の住處として相應しき山の奥、潙山禪師はこんな處の住持となつたのである。千五百人を容るべき肉山と云へば、大變な伽藍でもあつて、輪奐の美、人の目を聳てるやうなものかと思はるるが、それは大德の人が來てから後のこと。潙山は始めからそんな處へ祭り込められやうとしたのではない。これから開拓をやらうと云ふのである。處が、こんな山奥であるから五年たつても七年たつても、誰も來ない。依然として猿猱を伴とすると云ふ境涯。これでは如何な靈祐も多少か氣がもめたことであらう。自分一人をよくするだけなら、山にをらうが、市に出やうが、それはどちらでもよい。ただ道を傳へて法を此世に存しておきたいと思ふときは、此ままで朽ちてはいかん。何とか處方をつけねばならんと思うて、庵を棄てて山を下りてくると、その山の入口に當りて、蛇やら、虎やら、豹やらが相交横して路を塞いでをる。潙山は彼等に向ひて云ふやう、「汝等諸〻の獸類、そんなに吾途を塞ぐに及ぶまい、もし吾此山に緣があるなれば、汝等それ〴〵に散じ去つてしまへ。それとも吾此山に緣なしとなら汝等動くなかれ。われは勝手に汝等の間を通つて行くから、吾を食はんと思はば汝等の食ふに任かすべし」と。これを聞いて、虎狼の群は何と感じたか、それ〴〵に跡を隱して見えずなつた。潙山はもとの庵へ回つた。それから一載たたぬうちに懶安

と云ふものが五六人の雲水と共に百丈の處からやつて來て、色々と世話した。これが手始めとなつて、山下の村民も潙山の所在を知りだし、雲水も集つて來て、自然にお寺が出來上るやうになつた。遂には時の宰相斐休も潙山の德を聞いて彼に就きて道要を咨ふた。これが因緣となつて、大潙山同慶寺密印寺などが堂堂と出來上つた。果して潙山は千五百人の大善知識となつた。此の如くにして敎化を及ぼすこと四十年餘、大中四年（西曆、八百五十三年）に示寂した。壽八十三。「潙山警策」一篇の外に、「語錄」一卷あり。これは明朝の圓信及び郭凝之が「傳燈錄」などに散見してをるのを編集したのである。（「五燈會元」第九卷參考。）

潙仰宗の特色は潙山と仰山とが恰も父子の如く相和し、啐啄の機を展ぶる處に存する、それゆゑ圜悟の評にも「師資唱和、父子一家、明暗交〻馳、語默不露」とある。法眼は「方圓默契」と云うてをる。五祖法演は「斷碑橫ヘル古路ニ」。」潙山が「山」と云へば仰山は「川」と云ひ、「天」と云へば「地」と答ふ、其間の作用が如何にも密密に契合してをつて、何等の罅隙を見ず、何等の痕跡を留めぬ。此に潙仰宗の妙處がある。潙山と仰山と共に茶摘みをやつてをつたが、潙、仰に曰ふ、「終日茶を摘む、祇〻子の聲を聞いて、子の形を見ず」と。仰山茶の樹をゆらうごかす。潙山、「子祇〻其用を得て、其體を得ず。」仰、「いぶかし、和尙、いかん。」潙山良久、何とも言はずにをる。仰山、「和尙、祇〻其體を得て其用を得ず。」潙、「子に三十棒を放ゆるす。」仰、「和尙の棒某甲喫せば、某甲の棒は誰をして喫せしめん。」潙、「子に三十棒を放す。」又ある時潙山淨瓶をとりて仰山に度與した。すると仰山はこれを受けとらんとしたら、潙山は自分の手を縮めて、「是れ何ぞ」と曰ふた。仰、「和尙還つて這このなにをか見る。」潙、「もし果して然らんには、何ぞ更に吾に就いて覓むることをするか。」仰、「左樣ではありますが、仁義道中、和尙のために瓶を提り、水を挈くる、亦これ本分の事である。」潙山はそこで淨瓶をとりて仰山に過わたした。こんな例は潙山ある、親しく語錄につきて見たらよからう。「人天眼目」の評は次の如くである。

「潙仰宗者、父慈子孝、上令下從、爾欲喫飯、我便與羹、爾欲渡江我、便撑船、隔山見煙、便知是火、隔墻見角、便是知牛。」

尙潙山の事を云ふには仰山の事をも言はねばならぬが、此篇は餘り此點において精到を期せぬのであるから、他日の機を俟つ。詳しいことを知りたい人は、「五燈會元」卷九、「景德傳燈錄」卷十一、「正宗賛」卷四、「五家語錄」卷二などの中にて、仰山慧寂禪師（西暦八百四十年—九百十六年）の下を看よ。

法眼文益——法眼宗

五家のうちで一番晩く出たのは法眼宗である。五代の世、南唐李璟の代に金陵（南京）の清凉院に出世したのである。生れたのは唐の僖宗の光啓元年（西、八百八十五年）で、浙江省の餘杭、魯氏の子である。七歳のとき新定の智通院全偉禪師に依りて落髮し、次いで越州の開元寺で具足戒を稟け、明州即ち現時の寧波の育王寺で、希覺禪師につきて律を修めた。唐時代の禪僧は大抵始めに律を學んだものと見える。臨濟を始め法眼に到るまで、五家の禪匠は何れも毗尼を修めてをる。さらしてまた律寺で出家してをる。法眼の如きは禪で出家しても、また直ちに律師についてをる。禪は佛心宗と云ふほどで、形體の方は餘り重きを措かぬのであるが、苟も佛敎の僧侶となつては、戒律の鎧と云ふものをつけないと、武裝しない軍人と同じく、頗る調子が變なものとなるのである。殊に禪は動もすると埒の外へ逸し出んとする傾があるから、戒律を重んじて、それで形體を整へて行くのが、最も必要と思はれる。現時日本の曹洞宗では禪戒不二を一大原理として、授戒會などを盛んに行ふやうになつたは、或は此邊より歷史的系統を引いてをるのではないかしらん。「禪苑淸規」に「參禪辨道は戒律を先とす」と書いてある。禪と戒とは理論的方面だけでなく、歷史的にも大に關係があると云はなければならぬ。

法眼は亦他の禪匠と同じく戒律の研究だけでは滿足が出來なくなつた。また文雅の場に遊んだり、儒典を修めたりなどしてをつたが、それでは心に本當のゆとりが出來

ない。そこで玄機一發を期して大に禪門を叩かんことに決心し、南の方福州に到りて長慶に參じた。併し大發明することがなかつたので、更に同志のもの三人と共に嶺を越えて更に南を指して下つてきた。處が、途中大荒れに出くはして、羅漢の地藏院と云ふ小さな庵へはいつて、これを避けた。庵主は彼等をいたわりて爐邊へ案内して暖をとらしめた。種種の話の序でに庵主は「行脚の事作麼生」と尋ねた。文益は何心なく「それはわしには分明らん」と云ふと、庵主は「そのわからぬ處が最も親切な處である」と挨拶した。それから又羅什の弟子の僧肇が著した論のなかに、「天地與レ我同根、萬物與レ我一體」と云ふ一節がある。これが禪宗では有名な一則の公案となつてをるが、話は自然此方へ移つてきた。其時庵主は「山河大地と上座の自己と是れ同か是れ別か」と切り出した。文益はこれに對して「同」と答へたら、庵主は指を二本堅てて、これを熟視して、「兩つ」と云つて、起ち去つて仕舞つた。文益はさきからの問答で、この荒れ寺の和尚の尋常の禪者ならざることを知りて、驚くこと一方ならなかつた。それから廊下のあたりをぶら／＼歩いてをつて、ふとお寺の額を見ると「石山地藏」と書いてあるので、ここの庵主は玄沙師備の處でやり上げた老和尚桂琛であることを知つた。文益は心大に動いて此に留まりて修行をせんと思ひ、一行のものの意見を聞かんと思うてをるとき、庵主はまたひよつと出て來た。そのとき嵐も止んだので、さうして一行は出發の用意を整へてをつたので、心を殘しつつ門外へ出で去らんとした。桂琛はそれを送り出しながら、「あなたは平常三界惟心と說いてをられるが、それ其處に一片の頑石がある、それは上座の心内にありとせんか、心外に在りとせんか」と尋ねた。文益は「左樣でござる、心の内にあります」と答へると、庵主は呵呵として笑ひながら、「上座は行脚の雲水であるが、こんな一塊の石を心頭に安んじつつ、どこをどう彷徨しやうとするのであるか」と云ふた。文益はこれに對して何とも挨拶が出來ぬ、大に窘しんだ。そこで意を決して、とに角此地藏院で此旨を窮むることとした。

それから一月ばかりは彼は日日に見解を呈して大に辨道に勉めた。併し文益は元來が理智に勝れた人であつたと見え、中〻理屈を並べた。唯心論や唯識論などを頻りに說き出して、敎外別傳の旨を分別智の上に窮め去らんとしたものらしい。これは文益のみでない。少し敎理を見たり、學問をやつたりした人は、どうしても眞理の本體を知慮分別で會得が出來るやうに思ふものである。また眞理とか心性とか云ふものに、本體と名のついた何か不思議の一物が潛んでをるやうにも思ふのである。當時の文益禪師は或は近時知見をのみ是れ貴ぶ人人の適例としてよからう。併し此の古寺の住持の桂琛は禪宗坊さんであつた、いくら理屈をもつて來ても、論理の鋒先を突きかけて來ても、「佛法はそんなものでない」と、悉くはねつけた。ここに於いて如何なる文益もまた其技倆を施こす處なく、大に困窮して手も足も出なくなつたので、仕方なしに、「某甲詞窮し理絕す」と白狀した。ここまで正直にやつてくれれば何か轉處があるに相違ない、窮すれば通ずると云ふことは、心靈上の眞理と見える。桂琛曰はく、「若し佛法即ち禪を論ぜんとならば「一切現成」である、ぐづ〳〵理屈のやうな繞路を通るに及ばず、またそんなヴェールを蒙るに及ばぬと。法眼はこれをきくと始めて「なるほど」と合點がいつた。是が所謂る「サイコロジカル、モーメント」か、時節因緣の成熟か。「一切現成」など云ふことは、法眼もとくに承知してをつた所であらうと想はれる、今始めて聞いたところではあるまい。併しこれまでは心的經驗の上で、そんな境涯に達して居なかつたが、今までの處で一切の知見底を奪はれて仕舞つて居たものであるから、「一切現成」の一語が直ちにその心の底に徹したものであらう。

それから法眼は尙此に留まりて修業せうと思ふたが、他のものは諸方を遊歷せんと云ひだしたので、桂琛は法眼にも一緒に出て行くやうに命じた。「一切現成」を悟つてから此く遊歷に出るまでの時間はどの位であつたか、「會元」などには書いてない。遂に臨川までやつてきたら、其の州の知事に請はれて崇壽院に出世したとあるが、此出世までには、多少の年月があつたものと見ねばなるまい。さうして此年月の間に隨

分また修行を重ねたものであらう、あちらへも參じ、こちらへも參じて、心地修行の上に練磨に練磨を積んだことは、疑を容るべきでないと思ふ。崇壽院で一人の子方上座なるものを接得した。其問答が法眼宗の特色を顯はしてをるので諸書に引用せられてある。

子方上座は福州の長慶よりやつてきた。此長慶と云ふのは法眼も嘗て參禪をしたことのあるお寺で、其和尚の名を慧稜と云うて、修行の上においては頗る苦辛をした人である、雪峰と玄沙との間を往來して斯事を研鑽する實に二十年、七個の蒲團をすわり破つたと云ふ位である。つひに一日簾を捲きながら大悟した。そのときの頌の一に次のやうなのがある。

「萬象之中獨露身、　唯人自肯乃方親、
昔時謬向途中覓、　今日看來火裡冰。」

一日文益が地藏院の桂琛のために一香を拈じたので、子方は和尚に尋ねた、「あなたは久しく長慶にをられたのでありますが、長慶の法を嗣がずして地藏に嗣ぎ給ふは如何な道理でございます。」和尚、「それは長慶が萬象之中獨露身を說くことを解せぬからである。」そすると子方は拂子を擧げて見せた。和尚曰ふ、「それは萬象を撥ふのか、撥はぬのか。」方、「萬象を撥はぬ。」和尚、「そんなら獨露身とはどうぢや。」方、「萬象を撥うて仕舞ふ。」和尚、「萬象之中とばどうぢや。」子方是に於てその旨を悟つたと云ふことである。さうして是からと云ふものは、諸方の會下で知解を存して、自ら解悟の機を得ぬものは、法眼禪師の會下へ翕然としてやつてきた。師は一種獨特の手段があつて、此の如きものを接得するに妙を得てをつたからである。彼等の始めて來るときは行行如として肩で風を斬ると云ふ勢であるが、師が微妙なる一拶に逢ふと、皆轉身の處を得て、次第〳〵に服膺するやうになつた。

師あるとき上堂す、大衆立つこと久し、師乃ち云はく、「祇このままにて便ち散じ去つたとしたら、そこに佛法があるとしたものか、はた無いとしたものか。汝等試み

に說け看ん。若し佛法がないとしたら、汝等此處へ來て作麼とする。若し佛法が有るとしたなら大市裏の眞中人馬織るが如き處にも亦有るべきわけである。ここまで態々やつてくる必要はない。汝等甞て還源觀、百門義海、華嚴論、涅槃經など諸多の策子を看たことがあるか、さうして何れの敎中に這箇の時節が有つたか。もし有つたなら試みに擧して看よ。何れの經に何々の語がある、それが卽ち此の時節ではないかなどと道うても、何等の交涉かあらん。故に道ふ、微言も心首に滯うれば甞て緣慮の場となり、實際にして目前に居れば、翻つて名相の境となると。そんなら又何して翻へり去ることを得るか。もし又翻へり去ることが出來るなら、また何うして正を得去るであらうか。どうぢや、會すか。祇々そんなに策子を念ずることをするな、なんの用處もあるまいではないか。」尙語錄、機緣などは、「宗門十規論」一卷（法眼著）、「五燈會元」卷第十、「五家語錄」卷第五、「景德傳燈錄」卷二十四、「正宗贊」卷四、「禪林僧寶傳」卷四等を見よ。

文益禪師は其後金陵卽ち南京の淸涼山に移つた、さうしてそこで入寂したのである。その年七十四、法臘五十四。師の問答の跡を見ると、問者の話題を直ちに自分の答話となして、此に酬いられた例が二つ三つある。これは既にどこかで引き合ひに出しておいたから、今は其大要を指示するに止めておく。卽ち則監院が丙丁童子來求火の一則の如き、曹溪一滴水の如き、毫釐有〻差天地懸絕の話の如き、それである。一寸理屈に涉つてをるやうに見えて、而かも大に分別を超越した所がある。禪宗の消息の一端を窺ふに、何かの輔助となるとであらう。最後に、法眼が始めから特意としてをつた「三界唯心」の頌を紹介しよう。

「三界唯心、萬法唯識、唯識唯心、眼聲耳色、色不到耳、聲何觸眼、眼色耳聲、萬法成辨、萬法匪〻緣、豈觀〻如幻〻、山河大地、誰堅誰變。」

法眼下の宗風と云ふは臨濟の如く機鋒を貴ぶことなく、また曹洞の如く五位君臣などと云ふものを設けて微細の調べをやるのでない、寧ろ雲門が語言三昧を發揮するに似

たところがあるとしてよからう。則監院の場合の如き、韶國師の場合の如き、これを箭鋒相拄ふと云うて法眼の家風としてある。溈仰家には高貴尊勝の風があるが、法眼は商人的であるとも云はれてをる。五祖法演は法眼宗を「巡人夜を犯す」と評してをる、夜の番人が却て泥棒するやうなものと評してをる。俗に云ふこすいところが見えるからであらう。「人天眼目」には次の如く書いてある。

「法眼宗者、箭鋒相拄、句意合〻機、始則行行如也、終則激發漸服〻人心一、削〻除情解一調〻機順〻物、斥〻滯磨〻昏。」

大正五年二月廿五日印刷
大正五年三月一日發行

禪門叢書第六編
定價金壹圓

著作者　鈴木貞太郎
發行者　高島大圓　東京市小石川區原町六番地
印刷者　佐久間衡治　東京市京橋區西紺屋町廿七番地
印刷所　株式會社秀英舍　東京市京橋區西紺屋町廿七番地

不許複製

發行所　東京市小石川區原町六番地　振替東京一五六八六　電話番町二六〇八
丙午出版社

大正文庫

明治昭代の榮光を記念し大正聖世の文敎に貢獻せむがために現代第一流の宗敎家學者文藝家を煩はして『大正文庫』を發行し今や全部十二册こゝに完成す外形は電車汽車中の繙讀に便に內容は處世修養の伴侶に好し——（全部完成）

第一編 明治思想小史 文學博士三宅雪嶺先生著（定價手錢郵稅六錢）

第二編 此一筋 文學士沼波瓊音先生著（定價七十錢郵稅八錢）

第三編 來世の有無 新佛敎徒同志會編（定價七十錢郵稅八錢）

第四編 禪の極致 大內青巒先生著（定價六十錢郵稅八錢）

第五編 予が婦人觀 黑岩周六先生著（定價六十錢郵稅八錢）

第六編 狐禪狸詩 釋清潭先生著（定價六十錢郵稅八錢）

第七編 噴火口 高島米峰先生著（定價八十錢郵稅八錢）

第八編 ひとみの旅 杉村楚人冠先生著（定價六十錢郵稅八錢）

第九編 書窓車窓 加藤咄堂先生著（定價六十錢郵稅八錢）

第十編 人と超人 ショウ原著堺利彥先生譯（定價六十錢郵稅八錢）

第十一編 六十一年 文學博士村上專精先生著（定價六十錢郵稅八錢）

第十二編 沈默の饒舌 內田魯庵先生著（定價八十錢郵稅八錢）

佛敎講義錄

僅に一ヶ年で佛敎の大系が學び得られる

學界空前の佛敎講義錄出づ

佛敎がわからなくては日本の歷史の解釋が出來ない日本の文學も味ふことが出來ない日本文明の由來するところも知ることが出來ない從つて佛敎を知りたいといふ人は多いが唯識三年俱舍八年では手もつけられない そこで誰にでも手っ取り易く佛敎の大系が飲み込めるやうにといふので 現代有數の學者に請ふてその專門とするところの學科の講義をして貰ふことにしたのである世の徒に大家の名を列して杜撰な代作講義を揭載するが如きものと同一視するなかれ

佛敎研究法 東洋大學敎授 曾洞大學敎授 島地大等
佛敎概論 帝國大學敎授 ドクトル 加藤咄堂
印度の佛敎 帝國大學敎授 ドクトル 荻原雲來
支那の佛敎 東洋大學敎授 佛敎美術 帝國大學講師 文學士 中川忠順
日本の佛敎 豐山大學敎授 境野黃洋 宗敎學要義 眞言大學敎授 文學士 融道玄
佛典の解說 帝國大學講師 文學士 常盤大定 基督敎綱要 慶應大學敎授 東洋大學敎授 廣井辰太郎
法華經義釋 天台大學敎授 日蓮大學敎授 島地大等 神道綱要 足立栗園
禪學要義 宗敎大學敎授 ドクトル 加藤咄堂
歐米の佛敎 渡邊海旭
其他臨時講義を增加すべし

毎月一回十五日發行 一期菊判二百頁 滿一ヶ年（十二册）完結

	一ヶ月分	三ヶ月分	半年分	一年分
郵稅料	六十錢	一圓五十錢	三圓	五圓五十錢
東京	五十錢	一圓五十錢	一圓五十錢	五十錢
合計	一圓十錢	三圓五十錢	六圓	

發行所 東京小石川區原町六番地 振替東京一五六八六 電話番號 六二六八〇 丙午出版社

「萬朝報」記者　大住嘯風先生著

現代思想講話

定價金一圓廿錢
郵稅金八錢

現代人は須く現代の思想に通ぜざるべからず現代の思想に通ぜむにはまづ其の思想の由來せる傳說を究め遡んでゼームス、オイケン、ベルグソンの如き現代思想を代表する大思想家の說くところを知るを要す著者今此等碩學の著作の全體に精緻の研究を加へ深遠なるその根本思想を捉へ來りて明快直截に講話し人をして一讀直に現代思想に通曉せしむると共に又親しく大思想家に接して自己を養ひ人生の意義を了得せしめんとす洵にこれ思想講話に一新生面を開きたるの名著

春村隱士　久津見蕨村先生著

現代八面鋒

定價金八拾錢
郵稅金八錢

物平を得ざれば則ち鳴る而も著者はたゞ自ら鳴るを以て足れりとせず之を發して八面に當り散し十方に喝破すその餘先の向ふところ女優あり倫理あり藝者あり教育あり浪花節あり哲學あり活動寫眞あり宗教あり眞にこれ多角多趣味の一大珍書

春村隱士　久津見蕨村先生著

眞人偽人

定價金壹圓
郵稅金八錢

先生書を著はすこと數次而して發賣禁止の厄命を蒙ること亦數次聊か痛癢を起して朝野の名士一百餘人を捕へ大にこれに喰つてかゝる眞人はこゝに其面目を揭げ偽人はこゝにその面皮を剝かるその論辛辣その評深刻洵に筆端風を生じて文に聲あるの慨あり

堺　利彥先生著

樂天囚人

定價金六拾錢
郵稅金六錢

此書は狂暴、不平、鋭悍、狹毒、殘忍、無恥、悖逆を以て世に目せらる社會主義者が人の子として親として夫として友として將た人類の一員として宇宙の一分子として如何なる態度を持するかを其獄中生活に於て率直に露骨に赤裸々に發揮せる者之を一言にすれば社會主義者の安心を語れる者

東文社長　堺　利彥先生著

賣文集

定價金壹圓
郵稅金八錢

著者の友人先輩六十餘名家が著者の人物文章主義、事業に對する長短銷落奇拔痛快の評語を寶文社の記、著者自ら其の事業を語る　第一編　唯物的歷史觀　序　二、子に對する態度　三、宗教とは何ぞや　四、木下尙江君を評す　第二編　一、碁春の古服　二、予の夢　三、墓地見物　四、寸馬豆人　五、逆徒の死生觀　六、死の趣味　第三編　喜劇「谷川の水」（バーナード、ショウ原作）　一、告白　第四編　二、クレンクビュ、大杉榮　三、勿謀人　耶蘇、高島素之　畑寒村

堺　利彥先生著
ルソー自傳

赤裸の人

定價金九拾錢
郵稅金八錢

佛國の革命はルソーの「民約論」によりて點火せられ日本の教育界はルソーの「エミール」によりて啓發せらる波瀾重疊神出鬼沒の彼が生涯は彼自ら大膽にこれを告白して餘すところなし今これを譯して彼が眞面目を傳へむとするものは遠鶴能文の堺利彥先生なり一讀してルソー前に立てるの感を起さしむ

カウツキー先生原著
堺　利彥先生譯

社會主義倫理學

定價金壹圓
郵稅金八錢

哲學界には迷妄にして頑冥なる唯心論が跋扈し文藝界には不徹底にして神秘的なる本能主義が流行し宗教界及び教育界には淺薄にして偽善なる因習道德が唱導せらるゝ今日此の明晰透徹なる唯物的倫理觀を以て彼の蒙を啓き此の味を賜すは譯者が深く痛快とする所なり著者カウツキーは歐洲社會黨中第一の學者を以て目せらるゝの人日本の學界と文壇とは遂に此書を無視すること能はざるべし（譯者）

幸德秋水が最後の文章

基督抹殺論

定價金七十錢
郵稅金八錢

一代の論客として知られたる幸德秋水も歿つて天地の容れざる大逆無道を企て今や遂に斷頭臺上の露と消え去りぬ其鐵窓裡に吟呻せるの間特に此一卷を著す所論痛絕快絕行文悲絕愴絕嗚呼幸德秋水死に臨みて基督を扶殺し了せむとす抑々何の思ふ所あつて然るか多く語るに忍びざるなり秋水自ら曰はく「是れ予が最後の文章にして生前の遺稿也」と敢て滿天下の憎讀を冀ふ

文學士　渡邊又次郎先生著

最新論理學

定價金一圓廿錢
郵稅拾貳錢

本書は哲學の泰斗たる著者が學界の缺陷を補はん爲めに特に選述せる所に係り所論の明晰にして內容の整頓せる簡潔なる叙述の中に學士の卓見を洩したる所他に比を見ざる老熟の大著なり又綱外に重要なる題目を揭げ卷末に英語と對照せる詳細の索引を附したるが如き讀者の便益之に過ぐるものなかるべし

加藤咄堂先生著

筆と舌

定價金七十錢
郵稅金八錢

天下の大雄辯家大文章家たる著者が筆舌生活二十年の經驗を基として演說と文章との秘訣を語り模範を示したる名著にして殊にその生活實驗談は正に現代の青年を奮起せしむるに足る大文字なり

村上博士序
藤井瑞枝女史著

亂れ雲

定價金八十錢
郵稅金八錢

女史は跡見花蹊先生門下の才媛にして學界の先覺文學士藤井宣正氏の未亡人なり夙に文才と俠氣とを以て知らる「亂れ雲」一編集むる處二十餘章四百五十餘頁諷刺教訓皮肉或は鋭き觀察或は隱れたる溫情あらゆる方面を輕妙洒脫なる筆を以て大膽に且つ痛快に描寫し實に一部の現代世相史を成す

「無我愛」首唱者
伊藤證信先生著

新氣運

定價金八十錢
郵稅金八錢

斷然傳習と教權の束縛より脫却して世の罵譽嘲笑輕侮憎惡の中に立ち臆面なく忌憚なく無我の愛の根本眞理を吐露して以て混沌たる現代思想界に一道の新氣運を誘導せむと試みたるもの！

三宅雪嶺先生序
高島米峯先生著

廣長舌

定價金七十錢
郵稅金八錢

加藤弘之先生序
高島米峯先生著

惡戰

定價金八十錢
郵稅金八錢

島田三郎先生序
高島米峯先生著

理想的商業

定價金二十五錢
郵稅金六錢

前外務大臣　伯爵　林董閣下序
東北大學總長　澤柳政太郎先生序
櫻井女學校　干河岸貫一先生著

修養史譚

定價金壹圓
郵稅金八錢

加藤咄堂先生曰はく「米峯今胸中書物の氣を呵して『廣長舌』一篇を著す其の言ふ所は世事に疎なる學者輩の企ざて及ばざる所にして其の論ずる所は肉を刺し骨を通して當世人士の肺腑を刺る洵にこれ堂々當世の大文字」と

著者曰はく「これ僕が半生の惡戰史なり父なく母なく學なく識なく殊に加ふるに資金なく後援なき裸一貫の青年が如何にしてこの生活難の世に處し來りたるかを語るは又以て現代青年諸君が新運命の開拓に資する處なきを保せざるべし」と

賣ると買ふとは對等なりお客樣つて商人尾と垂れること甚だ道理なしそれ賣るに法あり買ふに道ありこの法を說きこの道を敎へ以てお客樣といふものゝ立場を明にし以て商人といふものゝ位置を高め而して買ふものには「うん」と買へと勸め賣るものにはしこたま賣れと告ぐるものは卽ちこの書なり

林伯爵曰はく「此の書を繙くに古今東西の史乘より異世同軌の事實二百對を擧げたる者にして敎師これを用ゐば以て講話の資を得べく父母これを讀まば以て庭訓の料たらむ」と

前外務大臣 伯爵 林 董閣下 纂譯

修養の模範

定價金七拾錢
郵稅金八錢

家庭では父母が子供にする話の種に因り學校では教師が生徒にする話材の陳腐なのに窮し寺院や教會では辯士が引用する美譚の乏しいのに困り而して青年は讀んで自修の資とするに足る程の書籍の少ないのを歎いて居る譯者これを憂へ書を讀む毎に精神修養の模範とするに足るやうな美談逸話を飜譯摘錄して遂にこの書を成すに至つたのである弊社今こゝに世の宗教家教育家及び父兄青年諸君の前に此の書の發行を報告することとなつたのは實に無上の光榮である

古聖實踐の芳躅を辿り商賈研究の結果を收め苟も規範とするに足るべき名論金言は悉くこれを援引して依て以て極めて平易に修養の理論を說明し苟も模範とするに足るべき善行美譚は悉くこれを蒐錄して依つて以て極めて明快に修養の方法を叙述す恐らくはこれ斯界未だあらざる精到完備の修養書たらむなり

文學博士 村上專精先生著

修養論

通俗
定價金壹圓
郵稅金八錢

文學博士 村上專精先生著

自信錄

改訂增補
定價金六拾錢
郵稅金八錢

これ博士の新著にして又實に博士が信仰の告白なり百々已の實驗を語り句々心の奥底を披瀝すまづ筆を「人生の目的」に起して「目的の成否」を明にし「實在と我れ」「佛陀と我れ」の關係より「自力と他力」の異同に及びて之を結ぶ五章廿七節說いて至らざるなく遺べて盡さゞるなし進歩せる佛教學者の見解は此書によつて窺ふべく敬虔なる佛教信者の態度は此書によつて知るを得べし

文學博士 村上專精先生著

誠のしるべ

定價金四拾錢
郵稅金八錢

誠は實に人生の基礎をなすものにして政治も實業も宗教も道德も教育も凡て此の根底の上に立たざるべからず今や村上先生古今東西の事例を引いてその然る所以を詳記せらる苟も誠を體得して眞の人たらんと欲するものは此書を讀め

文學博士 村上專精先生著

女性訓

定價金四十錢
郵稅金六錢

本書の內容は天職中庸貞操節義節操の五訓を以て女子座右の箴言となすにあり多年女子教育に經驗を重ねたる村上博士はよく女子の缺點を攫み來りて之を訓誡すその親切實に至れり盡せり凡て世の淑女たらむと欲する者は必ず其の座右を離すべからざる珍書なり

スタンフオルド大學總長 ジヨルダン博士原著
マスター、オブ、アーツ 中村平先生譯

人物の修養

定價金五十錢
郵稅金八錢

澤柳前文部次官特に長文の序を寄す其の一節に曰く「ジヨルダン博士は當今世界有數の學者にして北米第一流の人物なり且外國人中最も深厚なる同情を我日本及日本人に寄せらるゝ紳士なり我國人がその所說その意見を知らむと欲するの情並に之を知ることに依て利すること尠からざるは言を待たず……我日本人は本書に對し尊敬と同情とを表し以て博士に報ゆるところあらんことを希望す」と

ウヰリヤム、ハイド氏原著
鈴木券太郎先生譯補
修養處世

自己測量

定價金五十錢
郵稅金八錢

これ米國に於ける最新の處世術なり最新の修養法なり而して又實に最新の記術法に成れる名著なり今移して以てこれを我邦現代の社會に薦めむとするもの他なし吾人が惡德邪辭の穢朴人格完成の低礙立身處生の指導社會道德の軌範として眞に得難き大教訓たるを以てなり來れ青年諸等がこの生活難の世に處して新しき運命の寶庫を開くべき鍵はこゝにあり

黑岩周六先生講演

人生問題

定價金七拾錢
郵稅金八錢

人生とは何ぞや是れ千古の疑問なり哲人之を說き碩學之を論じて而して復疑の雲益々密に苦悶の人愈々多からむとす然るに現代思想界の泰斗黑岩先生自ら人生問題に逢着して疑問の源泉を探り大に其深趣を得て玆に此書あり叙ぶる所神の有無に始まり人生の悲運樂觀に終る眞に天籟の妙音なり世の悶ある人疑ある人遠に來つて此書に接せよ慰藉くは〻穆と滿足と活力とを得て溫く且つ光ある人生に觀着することを得ん

東北大學總長
澤柳政太郎先生著

退耕錄

正價金壹圓
郵稅金八錢

著者の序文に曰はく「官遊十數年其間人よりも多く云ひ多く論じたるも尙ほ胸ふくるゝ心地を忍んで言はざりし者多し」と知るべし本書は先生が實歷上百般の問題に逢着して滿腔の所感を披瀝したるものなることを諷刺あり教訓あり感慨あり痛罵あり氣焰あり理窟あり奇拔にして透徹せる觀察あり大膽にして穩健なる議案あり言はんと欲する所は言ひ盡くして毫も時勢に阿らず誠に現世の大文字なり 縱世家教育家宗教家及び現代の青年諸君は須く一讀せざるべからず

フエヒネル先生原著
文學士 平岡元吉先生譯

死後の生活

定價金五拾錢
郵稅金八錢

本書は現世の事實を基とし最高の詩的想像を參へ或は歸納的に或は類比的に未來生活を縱橫に叙述したる詩と科學との靈妙なる融合にして此書によれば千里眼幽靈等の不可思議なる現象も容易に解釋することを得故に本書は親愛者を失ひし人死生の疑惑に苦しめる者の無二の慰藉となり一般の讀者に津々たる興味を配ち又學者研究者に豐富なる暗示刺戟を與ふるや疑ふ可からず

杉村縱橫先生譯編

强肺術と肺病全快談

定價金九十錢
郵稅金八錢

本書前編は歐米に於ける最新の肺病根治法にして親しく譯者が實驗してその効果を收めたるもの後編は日本現代の名士が肺病全快の實驗談にしてこれによつて從來不治の病と定められたる肺病も必ず全快すべきものなることを立證せられたり世の醫師に弄ばれ賣藥に欺かれたる人々は本書を繙いて天來の福音に接せよ

文學博士 井上圓了先生著

南半球五萬哩

定價金九十錢
郵稅金八錢

南半球を一周し赤道を四過し濠洲南阿南米の各洲は勿論北は北極海より南はマゼラン海峽まで行程實に五萬哩の大旅行を試みて其の間の山容水態國情民俗の珍奇怪異を記して遺憾なし挿畫五十餘上更に花を添ふ

文學博士 井上圓了先生著

活佛教

定價金壹圓拾錢
郵稅金八錢

明治の宗教界思想界を震駭せしめたりし「佛教活論」は完成す僧侶の活躍寺院の興隆期して待つべし眞にこれ死佛教をして活佛教たらしむるの福音

帝國大學教授
文學博士 高楠順次郎先生著

國民と宗教

定價金七十錢
郵稅金八錢

本書は國民と宗教との關係を述べたる論文に非ずして著者が該博なる學識と深厚なる同情とを傾注して日本人が國民的生活の理想と宗教的生活の理想とを詳說せられたる新著也苟も日本の國民たる者日本の宗教家たる者は一讀せざるべからざる佳書たるのみならず行文は通俗平明なる講話體なれば又以て演說講話の好模範たるべし◎附錄として研究上修養上極めて重要の論文數種を收む悉く學界の珍

文學博士 松本文三郎先生閲
文學士 羽溪了諦先生著

釋尊の研究

定價金壹圓
郵稅金八錢

本書は釋尊以前の婆羅門教の理想に起して釋尊當時の印度諸學派の狀態より進んで釋尊の根本思想に說き及び以て釋尊の世界觀人生觀生死問題の解決及解脫の方法を明にし更に釋尊の涅槃に移りこゝに著者の全力を傾倒して群に涅槃の意義を解し具に東西學者の謬論を破る誠に教界及學界に於ける尊重すべき一大新研究なりと稱すべし

京都帝國大學文科大學長
文學博士 松本文三郎先生著

彌勒淨土論

定價金壹圓
郵稅金八錢

宗教學上殊に佛教史上理論實際の兩方面に渉り極めて重要なる地歩を占むるものは一淨土の思想」なり而して其半面は「阿彌陀淨土」の闡明によりて光輝を放てるも其他の半面は「彌勒淨土」の埋沒によりて全然暗黑に歸すこれ豈佛教史上の一大缺點にして又實に佛教界の一大恨事ならずや松本博士多年の蘊蓄を傾けその專攻する學科の立脚地より一彌勒淨土の由來淵源を詳論し博士の著『極樂淨土論』と相待つて玆に佛教の淨土思想研究は完璧を成せり何人か又此の新研究を味はすして恋に佛教の淨土思想を談ぜんとするものぞ

ポール、ケーラス先生著
學習院教授鈴木大拙先生譯

阿彌陀佛

定價金三十五錢
郵稅金六錢

阿彌陀佛とは何ぞや是れ佛教の根本問題也ケーラス博士その彩筆を揮ひ殆ど小說的結構を以て通俗に之が解釋を試む宜なりその歐米讀書界に好評嘖々たることや弊社曩に十年博士と居を同しうし最も博士と親善なる大拙先生を煩はして此和譯を得たり豈啻に佛の有無に證ひ心の不安に悶ゆる人のみこれを讀むべしと言はむや

東京帝國大學講師
文學士 常盤大定先生著

釋迦牟尼傳

定價金七十錢
郵稅金八錢

佛傳の大部を占むるものは神秘なる傳說なり世人或は直にこれを抹殺して顧みざるべしと雖是等の傳說が古來深く佛徒の頭腦を支配せるより見ればその裏に何等かの意義を有せざるはなかるべし此書は主として是等の傳說の起原を尋ね意義を究め南北兩傳大小兩系の相違を比較對照し以て此の千古の大聖釋迦牟尼佛の眞面目を傳へむとするに在り

文學博士 遠藤隆吉先生著

孔子傳

定價金壹圓四十錢
郵稅金十二錢

その涉獵極めて廣汎にその材料極めて豐富にその親察極めて銳利にその論斷極めて適確なるは勿論殊に各編各章到處に博士獨特の奇想と先哲未曾の結論とに接するを得るは洵に本書の特色として天下に誇稱するに足るところ

高等師範學校講師
勲五等
文學三等
理學博士 三浦藤作先生著

王陽明

定價金一圓五十錢
郵稅金十二錢

哲人王陽明もまた凡人吾等の如く事毎に理想と現實との衝突に逢うて悲觀し懊惱したりし也しかも能く自ら百般の問題を解決し益くして遂に悟徹の妙境に入る豈偉ならずや本書はこの王陽明の人格を主題として其の實生活と學說とを併叙し依つて以て凡人が如何にして哲人たるを得しかの經程を明にし吾等が修養の範としたる者なり

東洋大學講師
增補 境野黃洋先生著

聖德太子傳

定價金五十五錢
郵稅金八錢

佛教史家として夙に令名ある境野先生が其の燃犀なる史眼と圓熟せる文才とを傾倒して日本文明の開拓者日本佛教の教主たる聖德太子の事蹟を叙述し併て當時社會の政教習俗の特色を發揮したる名著にして文章の明快論斷の適確實に他に其の匹を見ざる所

大內青巒先生序
高島米峰先生著

一休和尚傳

定價金九十錢
郵稅金八錢

元日に髑髏を振廻はして人の度肝を拔き末期に糞を嚙つて梵天に捧げた彼一休後小松帝の皇子として九重雲深きところに榮華の夢を見やうともせず一襲一笠ただ平民的教化のために一生を送つた彼一休痴か狂かはた一大偉人か彼が眞面目そは本書の上に躍動して居る

曹洞宗大學教授
忽滑谷快天先生著

達磨と陽明

定價金壹圓拾錢
郵稅金八錢

本書は王禪二學を比較對論して禪學の精髓を發揮すると同時に王學の眼目を豁開して餘蘊なく進德の工夫修養の方法爲學の用心精神錬磨人格養成等一として儲はらざるなし眞にこれ精神界の指南針にして亦實踐道德の指導者たり

明楊起元評註
加藤咄堂先生和譯

和譯維摩經評註

定價金七十錢
郵稅金八錢

本書は明の楊起元が評を加へ註を施して斯經の哲理と文學とを闡明したるものを更に加藤咄堂先生が平明暢達の文を以て之を和譯し傳讚を附して通讀會解に便ならしめしもの世の佛を學び禪を談せむと欲する者には勿論誦習本として亦最も適當なり

加藤咄堂先生著

原人論講話

定價金六十錢
郵稅金八錢

佛教典籍多しと雖も之れを儒道二教の教義と比較して佛の嶄然一頭地を抜く所以を明にせるもの此の原人論に過ぎたるはなし著者今獨得なる通俗平易の筆を以て叮嚀懇切に此の原人論を講述し且つ近代思想を以て批評を加へ篇頭には添ふるに古人の解說を以てしたれば佛教の大意と人生問題の解決とは此の書によりて知ることを得べし

加藤咄堂先生著

通俗講話の理論及方法

定價金九十錢
郵稅金八錢

通俗教育の必要日に逼りてしかも通俗に講話し得べき人幾人かある本書は多年の研究と豐富なる經驗とを有する加藤先生が如何にせば通俗に講話して聽者を感動せしめ得べきかの理論と方法とを極めて親切に解說し多くの例話を擧げてその使用法を示されたるものなれば教化の秘訣雄辯の奥義講話の資料收めて一卷の中に在り苟も講壇に立たむと欲する人一たび本書を繙かむか忽にして一箇理想的の通俗講話者たるを得む

東洋大學講師 釋清潭先生著

寒山詩新釋

定價金五十錢
郵稅金八錢

是れ佛か是れ仙か是狂漢か得て解すべからざるものは寒山士なり是れ讖語か是れ詩語か是れ佛語か得て解すべからざるものは寒山詩なり宜なり千古の疑團牢固として拔けざることや著者精深雄大の學と才とを以て一筆勾斷彼が面目ここに於てか露出す寒山詩禪を知らんと欲するものは須らく此書を以て指南車となすべし

東洋大學講師 釋清潭先生著

和漢高僧名詩新釋

定價金五十錢
郵稅金六錢

本書、漢は唐宋元明清五朝の高僧に渉り和は虎關以後絕海義堂に至る大凡七十餘人の名詩を新釋したるものなり其詩雄渾なるもの高古なるもの典雅なるもの勁健なるもの婉麗なるもの清秀なるもの閑淡なるもの之れに悉く字解と讀法と評論とを付し平易を旨として深切を極む和漢高僧詩篇を釋義して此くの如きもの恐くは空前なるべし

慶應義塾大學教授 忽滑谷快天先生評釋

和漢名士參禪集

定價金壹圓
郵稅金六錢

本書は日本に於ては後醍醐天皇花園天皇龜山天皇の聖帝より北條時頼北條時宗武田信玄上杉謙信前田利家楠正成等古今の名臣支那に於ては唐の實宗皇帝宋の太宗皇帝等の諸帝より黃山谷蘇東坡白樂天張無盡要休等の碩學が參禪せる佳話を蒐め且和漢禪匠に關する逸話美談を合せて之に批評を加へ學道の正路を示し在家參禪の資糧に供する者にして讀者をして坐ながら古今の鴻儒碩學と禪を商量し名僧大德の鉗鎚に接するを得しむ

マクス、ミュラー博士原著 文學士清水友矢郎先生譯

宗教學綱要

定價金五十五錢
郵稅金八錢

清水學士佛教大學に教授として宗教學を講ずるや近代稀有の宗教學者マックス、ミュラー博士の原著を講本とし隨つて譯し隨つて教ふ今これを補訂潤飾して以て世に公にす蓋し邦文の宗教學書としては唯一無二の良書なり

第三高等學校教授 文學士野々村直太郎先生著

宗教と倫理

定價金五十錢
郵稅金八錢

正にこれ新宗教論なり新道德論なり而してまた實に人生問題最後の解決書なり世の靈と肉との饑渴に惱める者知と信との衝突に苦しめるもの若しくは夫の舊宗教と舊道德とに厭けるものは速に來つてこゝに無上の安樂地を見出せ。附錄には二宮尊德翁の宗教論を評す

眞宗補教 北條瑞麟先生著

眞宗の教義

定價金二圓
郵稅金十二錢

眞宗は實に日本佛教の精華にして又實に日本佛教の最大勢力なり本書は博識篤學を以て聞えたる北條師が多年の蘊蓄を傾けて宗祖親鸞上人を中心とし其師法然上人と其資蓮如上人との教義を信仰上より研究したる結果を組織的に叙述したる者なり他力教の秘奥を探り本願寺の盛なる所以を知らむとする者の必讀を冀ふ

梵語入門

アー、エフ、ステンツラー先生原著
エル、ビッシェル先生增訂
ドクトル、フイロッフイエー
荻原雲來先生譯補

定價金壹圓
郵稅金八錢

一部人士の梵語を學ぶ者あるも彼等は成な歐語の梵文典を使用すされど歐語梵文典を用ゐんは第一歐語を學はざる可からざる不便あり第二價格低廉ならす以上二種の缺點を補ひ梵文典に指を染むるの初步たらしめむがために創めて本書を公にす自今以後苟も英字母二十六を讀み得る人は僅少なる代價を拂つて悉く梵語を學ぶを得べく梵本を讀むを得べし

著者南天竺楞伽島に入りスマンガラ僧正の會下にありて巴利語を修むること多年其平生手記する所と遍旅延以下原語の文典と歐洲人の手に成れる巴梵兩語の語典とを併せ參考し以て本書を成すに至れり叙述の前後には多大の注意を拂ひて簡より繁に入り易より難に進むの方法に從ひたれば初學者にして巴利語並に梵語を修めんとするものには良好の伴侶たるべし

巴利語文典

文學博士 高楠順次郎先生閲
曹洞宗大學教授 立花俊道先生著

定價金一圓
郵稅金八錢

悉曇阿彌陀經

慈雲尊者眞筆
高楠順次郎先生序
阿湖得齋先生著

定價金壹圓
郵稅金八錢

悉曇阿彌陀經とは古來日本に傳はりたる梵文阿彌陀經即ち極樂莊嚴大乘經なり特に悉曇と冠語せしは新體梵字に倩ばんが爲なり梵文に加ふるに漢字羅馬字音を附し脚注には馬博士の訂正本との異同をもあげ終りに訂正本、辭書、唐秦二譯を掲げたり學者此の書によらば悉曇學の一端を窺ふに易からん

補校法王帝說證註

平子鐸嶺先生遺著
上宮聖德

正價金一圓
郵稅金八錢

『上宮聖德法王帝說』はその記事切實その文詞醇古多く寧樂已往の記錄を取つて正史の闕を補ひ誠に史家必讀の書たること今こゝに贅するを須ゐず而して狩谷棭齋先生の『證註』に至つては群說を折衷し正謬を辨別して先人未發の見解甚だ少からざるは史家の夙に嘆服するところしかも尙多少の遺漏あるを免れざるなり然るに我が平子鐸嶺先生博覽强記にして史眼犀利棭齋先生の未だ見ざるを見未だ言はざるを言ひ誤れるを訂し足らざるを補うて錦上更に花を添ふ敢て之を史家と佛家とに薦むる所以なり

科註原人論

文學博士 村上專精先生編

定價金十二錢 郵稅金二錢

科註大乘起信論

定價金十六錢 郵稅金二錢

この二書は共に筆記書入れ等に便せんがため本文の上下に空白を存し體きたれば學校の教科書學會の講本として最も適當なり

東洋史

高島米峰先生著
學生參考

定價金十三錢
郵稅金二錢

著者曰はく「形に於ては恐らく既刊東洋史中の最も小なるものたるべからむも學生を貴くる點に於ては或は最も大なるものあるべきを信じて疑はざるなり」と

偉人の跡

文學博士 三宅雪嶺先生著
增訂

定價金壹圓
郵稅金八錢

古今東西の偉人數十名を捕へ其の時代を語り其の性格を論じ其の功過を明にす觀察警拔にして行文微妙今の偉人の眼に映じたる古の偉人の眞面目は躍如として玆に活動す人若し偉人とは如何なる者か偉人は如何にして修養したるか偉人は如何なる事業を爲せしか偉人は死後に何を遺せしか社會は如何に偉人の死を飜しかを知らむと欲せば冀くは此の偉人の偉著に問へ

小泡十種

文學博士 三宅雪嶺先生著

定價金四十五錢
郵稅金八錢

博士の學殖富贍に博士の見識卓越に博士の文章超凡なるを世既に定評あり今此學と識と文とを傾倒して此著を作す政治を論じ宗教を說き文學を語り人物を評す其の筆の向ふところ流れては浩瀚盡きざる大河となり散じては紛紛限りなき飛沫となる小泡か激瀾か蓋し近代稀有の快著也

文學博士　三宅雪嶺先生著

明治思想小史

定價金五十錢　郵稅金六錢

日本の大思想家三宅雪嶺先生今や思想の最高壇に立つて明治思想の變遷を語るまゞ明治以前の思想界に筆を起して維新の思想に入り進んで最近四十五年間の政治經濟學術道德宗教教育社會等の各方面に亘り深刻の觀察を遂しうして劉切の結論に到る今や大正維新の風雲に際會せる日本國民は明治年間國運の大發展が果して如何なる思想の產物なりしかを知悉して依て以て第二の維新を大成せざるべからず果して然らば此書こそ眞に大正國民必讀の書

文學士　沼波瓊音先生著

此一筋

定價金七十錢　郵稅金八錢

現時俳壇の飛將軍、沼波先生の新著なり。先生曰はく、「この書に、大知識大感想ありて、天下の士、必ず一本を求めよとは言はず。たゞ書中、或物あつて存す。この或物は、或人には輕んぜられんも、或人にはゾクゾクと嬉しがらるゝなり。其の嬉しがりそうな方にのみ、これを侑む。」と本屋曰はく、「輕んずるも可、嬉しがるも不可なし。たゞ買ふ人の多からむことを、切望に堪へず。」

新佛教徒同志會編

來世之有無

定價金七十錢　郵稅金八錢

吾等の死後はどうなるか地獄があるか極樂があるか抑々又吾等の靈魂は滅するのか滅しないのか元來吾等に靈魂などゝいふものがあるのか無いのか凡そ此くの如きの難問題に關し現代各方面の名士二百數十人の解答を得てこれを滿載したのが本書である古來の大疑團も本書一たび出づるに及んで忽ち雲散霧消するであらう

高島米峰先生著

現代青年論

定價金十五錢　郵稅金二錢

本書は著者が某會社の青年に向つて講演せるものゝ筆記にして各種青年會などの施本として最も適當なり內容目次左の如し

一、青年の力―二、今の青年は依賴心が强い―三、今の青年には氣慨がない―四、今の青年は成功を急ぐ―五、今の青年は一事に精しくなくて多岐に勞する―六、今の青年は思想が薄弱である―七、今の青年は信仰が乏しい―八、今の青年は同情が乏しい

大內青巒先生著
結城素明畫伯畫

禪の極致

定價金六十錢　郵稅金八錢

不立文字の教理も、文字に依らざれば知ること能はず。以心傳心の妙諦も、言語を離れては傳ふること能はず。但惜しむ、古來禪を說くもの、徒に難解の語句を弄して、人をして愈々出でゝ愈々迷はしむることを。大內先生學深く德高く、敎禪二面に於て、眞に現代の達人たり。殊に先生、平談俗話を以て、幽玄の理を說き、深遠の法を語ること、殆ど天下獨步、而して本書は即ち先生得意の作、禪の極意、正にこれに盡きたりと稱するも、敢て溢美にあらざるなり。附錄『五位頌講話』また先生獨創の見識を以て、縱橫に講解す、蓋近來の大文字なり

黑岩周六先生著

予が婦人觀

定價金六十錢　郵稅金八錢

進步的にして却て稍保守的の檢束あり古きが如くして實は極めて新しき趣味を有する黑岩先生の婦人觀はトルストイ的の絕對貞操觀に配合するに經濟的獨立の實際問題を以てし種々樣々の方面よりして斷案の片鱗を示しつゝ遂に人をして成程と承服せしむる老巧親切の文を爲す眞に現今婦人問題の燈明臺也世の年頃の娘その父母及び女子教育家の精讀を冀ふ

釋　清潭先生著

狐禪狸詩

定價金六十錢　郵稅金八錢

今世何ぞ夫れ狐禪狸詩の多きや著者大獅子吼猛然として起ち狐禪の窠狸詩の窟一蹴して之を壞る其の毫端に上りしもの實に此の一書なり今や裝成りて人間に橫行す世の狐禪狸詩に太平なる者は讀むも詮なしたゞそれ狐禪狸詩に不平なる者のみこれを讀むべし作詩壇上別に一新生面を開き人をして詩禪一味の妙境界に遊ばしむ

中原鄧州老師著
大石正巳居士序　飯田欠伸居士跋

南天棒禪話

定價金一圓廿錢　郵稅金八錢

機鋒辛辣得て近づくべからざるが如くにしてしかも慈敎懇到兒女童孩も亦度せずむば止まざるもの實に是れ吾が南天棒鄧州老師の面目なり今著はすところの禪話一卷卷中の所談悉くこれ釋尊拈華し迦葉微笑する底のものの縱橫に說き無礙に辯じて眞に四方八面來旋風打の概あり人若し南天の痛棒亂下し來るの間に立ちて平然としてこれを喫了し得ば則ち人間の大事こゝに成るべし冀くばまづ聊かこれを試みよ

釋清潭先生主筆
月刊雜誌
漢詩
一冊五錢
一年分五十錢

釋清潭先生を中心とせる漢詩國淡社の機關雜誌にして毎號「作詩法講話」「三體詩講話」「陶淵明集講話」及び社友の作品を掲載す
別に漢詩漢文の添刪代作等の規定あり切手五錢送付せらるれば規則掲載の「漢詩」一部贈呈す

土屋鳳洲先生著
晩晴樓文鈔
定價金八十五錢
郵稅金八錢

本書は一代の鴻儒文壇の巨匠たる土屋弘先生の文集にして表あり說あり辨あり序あり記あり碑あり傳あり贊あり銘あり題跋あり凡そ漢文の諸體備はらずといふことなし苟も漢文を學ばむと欲するものこれを模範とせば又良師なきを憂ふるを須ゐざるなり殊に明治時代の碩學文豪辭を極めて各篇に讃評を加ふ卒然卷を開けば天下の文星一堂に會して道を談じ文を論ずるの偉觀を成す綠陰深處にこれを繙かば涼風自ら起つて神氣清爽を覺えむ

村上專精先生序
高島米峰先生著
噴火口
定價金八十錢
郵稅金八錢

著者心内に鬱積する熱火今や噴出として爆發しこゝに礫となり砂となり灰となりて四方に飛散す之を慘狀と言ふべきか之を偉觀と稱すべきか著者自らこれを知らずたゞ著者はその舊著『廣長舌』『惡魔』等に比し來つて本書の愚論惡文更に一段の進境あるを確信するのみ

文學博士 村上專精先生主筆
月刊雜誌
人道講話
一冊七錢五厘
一年分八十二錢

『人道講話』は村上先生の人道講話を連載する者
『人道講話』は教育と宗教と道德との三面を有す
『人道講話』は精神の涵養を以て教育の本領とす
『人道講話』は人道の實踐を以て宗教の要務とす
『人道講話』は父母の孝養を以て道德の大本とす

記者 松本博士、内藤博士、新村博士、上田博士、小川博士
月刊雜誌
藝文
一冊廿二錢
半年分一圓廿錢
一年分二圓卅錢

『藝文』は京都帝國大學教授及び其他學者の研究創作を發表する機關雜誌也
『藝文』は東西兩洋の學術文藝に對し最謹嚴深窮の批判を下さむとする者也
『藝文』は關西思想界の中心として乘て關東の思想界を風靡せむとする者也

『東京朝日』記者 杉村楚人冠先生著
ひとみの旅
定價金六十錢
郵稅金八錢

長い足、鋭い眼、明な頭、太いペン、而して此書成る。しかも山水の景を描かず、風月の樂を語らず、專ら現代を寫し、人間を論ず。曾て、洛陽の紙價を貴からしめたる『大英遊記』以來の名文にして、又曾て、發賣禁止の厄命を蒙りたる『七花八裂』以來の奇著なり。

加藤咄堂先生著
書窓車窓
定價金六十錢
郵稅金八錢

天地の秘奥を探り、人心の機微を明にす、乃ちこゝに天籟あり、地籟あり、人籟あり。これによつて世界の知識を求むべく、これによつて古今の德澤に浴すべし。内に在りては書窓の良師、外に出でゝは車窓の善友、一卷の書また尊貴なるかな。

學習院教授
帝國大學講師 鈴木大拙先生著
スエデンボルグ
定價金五十錢
郵稅金八錢

神學界の革命家、天界地獄の遍歷者、學界の偉人、神秘界の大王、古今獨歩の千里眼、精力無比の學者、明敏透徹の科學者、出俗脫塵の高士、之を一身に集めたるをスエデンボルグとなす。吾國今や宗教思想界の風雲漸くまさに急ならんとす、精神を養はんとするもの、時世を憂ふるもの、必ず此人を知らざるべからず。これ此書成る所以。

文學博士 村上專精先生著

六十一年

定價金九十錢
郵稅金八錢

これ村上博士が過去六十一年間惡戰苦鬪の活歷史を大膽に赤裸々に叙述せられたるものにして現代青年が以て龜鑑とすべき絶好の立志傳たり殊にその間に於ける佛教の盛衰消長及び教界人物に對する忌憚なき評論は明治佛教の側面史として教家の一讀を要求するに足るの實益と趣味とを具有する大文字にして眞にこれ教界未だ有らざる自叙傳なり

文學博士 松本文三郎先生著

佛典の研究

定價金九十錢
郵稅金八錢

松本博士は佛典の本文批評に於て實に日本學界のオーソリチー也多年その蘊蓄を傾けて研究せられたる佛典已に幾十人加ふるに艶近燦煌その他に於て發掘せられたる佛典の研究は正に先哲未到の新說なりとす佛典の眞僞を如何に辨別し經論の精神を如何に會得すべきかに心を勞する人まづ此書を一讀せざるべからず

久津見蕨村先生著

ニイチエ

定價金九十錢
郵稅金八錢

ニイチエの研究ニイチエの理會ニイチエの祖述に於て著者の如きは邦人中未だこれあらざる所今其爛熟の想と奇峭の文とを以てニイチエの性格ニイチエの事業ニイチエの思想ニイチエの人生觀世界觀ニイチエの哲學ニイチエの理想を描出し人をして親しくニイチエに接するの感あらしむ

文學博士 松本文三郎先生著
增補

宗教と哲學

定價金七十錢
郵稅金八錢

本書全編十有四章まづ筆を「釋尊は何を說きしか」に起し「宗教と道德」「研究と信仰」等次第を逐うて遂に健全なる宗教の基礎は哲學的論據に在ることを說明し延いて老莊程子の支那哲學に論及す惟ふに病弱なる現代の思想界は此書によりて元氣の回復を求め得む乎

東洋大學教授土屋鳳洲先生編
評解

唐宋八家文鈔

定價金四十五錢
郵稅金八錢

夫の唐宋八大家文が文章の模範と仰がるゝもの久し矣惜しいかな卷帙浩繁初學の徒却つて岐路に亡羊の嘆なき能はず今我が土屋先生これを遺憾となし八大家の名文中更にその精髓五十編を選びこれに細評を加へて以て文章の結構作法を知らしめこれに詳解を施して以て故事熟語の意義を明にす學校教科の用書として甚だ適當なるのみならず地方青年獨學の良師として實に得易からざる珍籍たり

帝國大學講師
學習院教授鈴木大拙先生著

禪の第一義

定價金一圓
郵稅金八錢

禪は東洋に於ける精神界の特産なりしかも從來誤つて山林の徒のみによりて拈弄せられ活きたる人生と殆ど沒交渉なるかの觀ありしは蓋し未だその第一義を闡明しその着手の處を說述することの徹底せざりしに基するものならずむばあらず著者參禪辨道三十年その實驗の歷程を精叙しその所得の公案を解說し一は以て初學者の指針となし一は以て人生の苦悶を除去せむとす不立文字教外別傳の禪も本書出てゝその近代的色彩の顏る鮮なるものあるを看取し得む

內田魯庵先生著

沈默の饒舌

定價金八十錢
郵稅金八錢

維摩の一默その聲霄の如しといふ今や日本文壇の老維摩內田魯庵先生が沈默の懷中に一大獅子吼を試み婦人を濟ひ文士を度し靈肉の調和を說き生活の難易を敎ふその言の懇切なるその論を穩健なる誠に人間處世の好南針たりこれを目して饒舌となしこれを評し咄哉と言はむは蓋し未だ方丈の妙諦に參する能はざるもの

スエデンボルグ著
鈴木大拙先生譯

新エルサレムと其教說

定價金六十錢
郵稅金八錢

此書は思想界の奇傑スエデンボルグの新基督教說にして救濟には信と行とを要すること愛卽ち意志は人格の基礎なること自由あるが故に善惡あること善惡あるが故に神の榮光彰はるゝこと等の諸說を簡明懇切に述べたる快著

ベアナードレコウ作　堺利彦先生譯

人と超人

定價金九十錢
郵稅金八錢

シヨウ熟全盛の今彼の最大作の譯書出づ彼れの生命哲學彼の剛性親彼の皮肉彼の諷刺彼の滑稽彼の冷嘲彼の熱罵悉く此一篇の中に在り
譯書內容は本文の外、譯者の序、原著の序、原著通俗版の序、シヨウの人物及著作、革命家必携及其座右銘、私が會敎で見た人と超人（松居松葉）等あり

文學博士　井上圓了先生著

おばけの正體

定價金五十錢
郵稅金八錢

本書は妖怪研究の大家たる井上博士が明治維新以後今日に至るまで日本の各地に起つた妖怪事實の中で特に珍な者奇な者恐ろしい者懷しい者悲しい者憐れな者面白い者馬鹿々々しい者百三十件を調査して一々その原因を示し百鬼夜行の眞相を明にした快書であつて怖がるくせに化物話を聽きたがる小供のためにも「幽靈の正體見たり枯尾花」などゝ悟つたつもりの大人のためにも趣味と實益とを與へること多大である

東洋大學長　大內青巒先生著

靑巒禪話

定價金壹圓廿錢
郵稅金八錢

この人にしてこの著ありといへばそれだけでもう澤山なりそれ以上廣告文でコケを威す必要いづこにかあるしかも試みに一二節を加ふれば平談以て微妙の法門を說破し俗語以て別傳の眞諦を闡明す廻を設くる六十有餘悉くこれ天地の祕奧を探り人心の機微に觸る迷悟見惑の如きは讀者の探ぶところに委するのみ

文學博士　高楠順次郎先生
文學士　木村泰賢先生　共著

印度哲學宗敎史

定價金貳圓
郵稅金八錢

本書は著者が印度の哲學宗敎の大成は日本學界の本務なりといふ覺悟の上に立ちて久しく東京帝國大學に於て講述せる稿本を增補整理したるものにして斯界唯一最高の權威なり牧むるところ吠陀、奢、奧義書、經書及び諸學派の開展に涉り洵にこれ印度の根本思想を說盡して餘蘊なきもの苟も世界無比の寶庫と稱せらるゝ印度古代の文明について闡明するところあらむと欲するものは須くまづこの秘鑰を攫らざるべからざる也

新井石禪老師著

修道禪話

定價金一圓
郵稅金八錢

新井石禪老師は學に於て德に於て舌に於て筆に於て現代禪門第一流の人なり今や世俗の往往にして野狐禪に滿足し邪禪に墮在するもの尠からざるを見て慈心到底默止するに堪へず玆に活禪談を試みて修道處世の南針を指示す釋尊一字不說の妙諦遠磨西來の眞意こゝに於てか始めて了了明明

學習院敎授
帝國大學講師鈴木大拙先生譯

神智と神愛

定價金一圓五錢
郵稅金十二錢

本書は天界地獄の遍歷者として學者宗敎家を驚倒せしめたる思想界の奇傑スエデンボルグ氏の人生觀を率直に披瀝したる者也愛は宇宙の本源にして智は愛より生ずる所以より說き起し造化の大功人生の目的を闡明す所論警拔斷案透徹譯筆明快

高島米峰先生著

店頭禪

定價金八十錢
郵稅金八錢

禪坊主の禪にもあらず野狐禪の禪にもあらず語默動靜皆是禪の禪也學林の禪にもあらず僧堂の禪にもあらず鷄犬堂の帳場格子裡に獨り自ら實參實究したるところの禪也
傳統の禪にあらずして店頭の禪也空想の禪にあらずして創造の禪也即是れ生活の實驗也信仰の告白也

建仁寺派管長　竹田默雷老師著

禪の面目

定價金一圓
郵稅金八錢

語も亦雷の如く默も亦雷の如し本來の面目眞に此の如きのみ今絕版せる『默雷禪話』二卷數百則中より奇峭の論と懇到の說とを選びて百五十則を獲たりこれを世に行ふ所以のもの主とし生死街頭に迷惑するものをして自性徹見の境地に到達せしめむと欲してなり

『修養世界』主筆　菅原潤禪師著

禪林奇行

定價金壹圓
郵稅金八錢

和漢古今の居士禪僧が奇行佳話を蒐むるもの實に百數十項一として古聖證悟の過程前賢參究の所得たらざるなし綿密なる佛祖の行履澄刺たる禪林の消息正にこゝに盡きたりと稱すべき也

釋宗演老師著

拈華微笑

定價金壹圓
郵稅金八錢

釋尊拈華し迦葉微笑す個中の消息何人か會し又何人か會せざる會する者を聖と稱へむも當らず會せざる者を凡と呼ばむも亦當らず凡聖一如の境地は畢竟此書を心讀し體讀したる者にして始めて到達し得べしとなす耳

京都市平安中學講師
トーマス、カービー先生著

英文佛教讀本

定價金五十錢
郵稅金六錢

著者は敬虔なる佛教信者として熱心なる佛教研究者として夙に世に推重せらるゝ英人にして本書收むる所釋尊の傳記印度諸王族の佛教傳播に盡しゝ狀況及歐米に於ける佛教學者の筆に成れる論文英語に飜譯せられたる佛典の拔萃並に將來佛教の歐米に傳播すべき趨勢に關する著者の豫見等凡そ二十餘章蓋し佛教學校の英語教科書として唯一無二の良書たり

帝國大學講師
ドクトル　荻原雲來先生著
梵漢對譯

佛教辭典

定價金五圓
郵稅金十二錢

本書收むる所顯密二教の法數名目を始め經律論三藏中の學語は勿論佛菩薩天龍八部天象地儀山川草木飲食器皿救方時令より動詞副詞に至るまで語數甚だ豐富にして單に佛教辭典としてのみならず又梵漢辭典としても未曾有の寶藏なりこれを以て佛教を知らむと欲するもの梵語を學ばむと欲するものは言ふまでもなく一般語學者印度文藝の研究者に取りても亦唯一無二の寶典たり

曹洞大學長　秋野孝道老師著

禪の骨髓

定價金壹圓
郵稅金八錢

以心傳心の禪直指人心の禪そこに何の膚肉ぞ何の骨髓ぞ今吾が秋野老師特に『禪の骨髓』と題して一卷を成す或は言はむ是れ好肉上の瘡と曷ぞ知らむ是れ指月の指なることを世の指に執着するものは則ち去れ迷雲一たび拂へば眞如の明月耿々として天地こゝに朗然これ此書を學人に薦むる所以

原僧運老師著

禪の捷徑

定價金壹圓
郵稅金八錢

教外別傳と說き不立文字と說き而して實參實究を强ふ禪も亦難いかな曷ぞ知らむ語默動靜皆是禪喫茶喫飯も亦即ち是れ禪ならざることなきを果して然らば人誰れか禪に眠り禪に覺め禪に生き禪に死せざるものぞ僧運老師八十年の禪生涯その行業直ちにこれ禪の眞諦今婆心默止し難くて敢てこの捷徑を示す寧ろ却て大道坦々として長安に通ずるものあらむ

荒井泯光先生著

道元禪師

定價金壹圓
郵稅金八錢

曹洞宗の開祖道元禪師遠く宋土に渡りて慕遠尊師し深く佛陀所說の核心を探り詳に祖師面授の單的を領す而して歸來喝破すらく「空手還鄉」と空手還鄉の那一曲知らず何等の妙調ぞ佛法の要旨玆に存し禪の眞髓玆に盡く著者今禪師が一代の行狀事蹟を描寫するに流麗にして巧妙なる文辭を以てし禪師の風丰面目をして卷中に躍動せしむ通俗にして文學的なる禪師傳は蓋し此書を以て嚆矢とせむ讀者これに依つて曹洞禪風の淵源を究むべく又これに依つて悟徹の洗範を得べし

原田祖岳先生著

參禪の階梯

定價金壹圓
郵稅金八錢

原田老師洞濟二家の宗風を把持し銀山鐵壁容易に攀づべからざる底の禪に姑く階漸を設けて學人のために參禪の一路を示す丈の胡亂に大悟を語りて鬼窟裡の活計を作すが如き野狐精者流は乃ち問はず苟も荊棘林を透過して清風明月の趣を會得せむと欲する者は須らく秩序整然たる階梯を辿れ

大石正巳君序　飯田橋隱君跋
南天棒　中原鄧州老師著

南天棒禪話

定價金一圓廿錢
郵稅金八錢

機鋒辛辣得て近づくべからざるが如くにしてしかも慈敎懇到兒女章拔も亦度せずむば止まざるもの實に是れ吾が南天棒鄧州老師の面目なり今著はすところの禪話一卷卷中の所談悉くこれ釋尊拈華し迦葉微笑する底のもの縱横に說き無礙に辯じて眞に四方八面來旋風打の概あり

東洋大學敎授　境野黃洋先生著

活ける宗敎

定價金一圓
郵稅金八錢

著者が限りなき渴仰と量りなき崇敬とを拂つて居る日本佛敎の代表的偉人中特に　聖德太子傳敎大師　法然上人　日蓮上人　親鸞上人　蓮如上人　白隱禪師の人格と敎義と信仰とを精道元禪師　叙したもので正にこれ一部の「列傳體日本佛敎史」であるしかし世間のではなくて此等の偉人が親しく體驗したる內的生活の上に活躍して居るこれによつて佛敎の大意もわかるし眞の宗敎を語つたものであるこれにつて佛敎の信仰も理會せられる健全なる佛敎の信仰も理會せられる

賢學博士　岡島狂花先生新著

現代の西洋繪畫

定價金一圓六十錢
郵稅金十二錢

岡島博士多年研鑽の所得を組織して茲に此の書を成すその內容の概略を摘記せむか。一、代表的名畫三十二葉を挿入したる事二、從來ありふれたる氣分的斷片的文集にあらずして科學的の著作なる事三、現代西洋十六ケ國の繪畫を取扱ひたる事四、筆を太古の繪畫史に起し古き傾向より進みて新しき傾向即ち印象派、新印象派、後期印象派、未來派、色彩象徵派、立體派より昨年分れたるオルフイズムに至るまで悉く精叙して盡さゝるなき事五、一千餘語の原語索引を附したる事六、現代の版畫を七節に分ち廣告畫にまで論及したる事

加藤咄堂先生
高島米峯先生　推讚　笛岡清泉先生著

美人禪

定價金一圓
郵稅金八錢

加藤咄堂先生曰はく「戀に泣く美人が嬌態を寫して佛々祖々の玄機を語る文に艷冶の趣ありて想に超脫の旨を存す執れか禪執れか戀『美人禪』の一書讀み了りて轉と恍惚たり」と高島米峯先生曰はく「達磨傾城之圖に參透するの具眼を以てせば始めてこの書一卷別傳の妙敎理不立の好文字たることを看取し色即空なるところに美人の禪を味ふべく空即色なるところに禪の美人と相見すべし」と

帝國大學敎授
文學博士　高楠順次郎先生閱
帝國大學講師文學士　木村泰賢新著

印度六派哲學

定價金二圓卅錢
郵稅金十二錢

六派哲學（數論、瑜伽論、勝論、正理論、聲論、吠檀多）は印度哲學の代表的思潮にして諸種の論義と學說と一として備はらずと言ふことなしなれども我國未だ之に關して確乎たる著述の發表せられたるを聞かざるは眞に學界の一大恥辱なりとす木村先生夙に之を慨し研究多年漸くその完成を告ぐるや更に東京帝國大學に於て之を講ずること二學年其間又多少の補訂を加へて遂に汎く之を世に問ふに至りしなり時恰もタゴールによつて今更の如く印度思想の雄大深遠なるに驚嘆する者多き貧弱なる我國の思想界に向ひ本書の如き斯學最高の權威たるべき名著を推薦することを得たるは實に弊社の誇のみならざる也

スエデンボルグ著
帝國大學講師
學習院敎授　鈴木大拙先生譯

神慮論

定價金二圓卅錢
郵稅金十二錢

『神慮論』はスエデンボルグが玄奧神祕なる宗敎を知るべき一大著述なり『天界と地獄』は現世と離れて離れざる心界を描出し『神智と神愛』は絕對無限性の神德を說破し而して『神慮論』は實に此の神德か萬物の上に現はるゝ所以を詳述したるものにして天界地獄の遞歷者神祕界の大王神學界の革命家たるス氏の所說を知らむと欲する者は本書を讀め

建仁寺管長　竹田默雷老師著

禪機

定價金一圓
郵稅金八錢

不言言の妙諦言ひ得て盡さゞるなく不說說の眞源說き得て至らざるなしその舌鋒銳利互に人間の皮肉を刺し肺腑を刻る正にこれ眞禪機の暴露

高橋竹迷先生新著
（口繪・三禪師自讚畫像）

隱元・木庵・即非

定價金一圓
郵稅金八錢

著者今流麗なる筆を呵して夙に黃檗三筆の稱ある隱木即三禪師の哀怨なる生涯穎脫なる言行書畫風流の三昧を描寫し以て明朝滅亡史を背景として江戸時代佛敎の活舞臺に躍り出でたる黃檗禪の眞面目を傳ふ蓋し禪界最初の著作たり

加藤咄堂先生新著▲教育家宗教家無二の寶典

通俗講話の理論及方法

總クロース箱入
定價 九十錢
郵税 八錢

文部省が一たび通俗教育調査會を設立し通俗講話の必要を鼓吹するや天下の教育者翕然としてこれに靡き市府縣の教育會より郡村の教育會に至るまで擧げて通俗講話のために努力せざるものなしたゞその最も憾みとするところは講話者たの人を得ることの難きにあるが如し惟ふにこれ現時の教育界宗教界學術界を通じて演說說教講義を爲す人の乏しきがためにあらずしてたゞ通俗講話の理論を知悉し方法に慣熟したる人の少きがためならずんばあらず

本書は通俗講話に多年の研究と豐富なる經驗とを有せる加藤先生が帝國教育會東京府教育會及その他各府縣の教育講習會の懇請によりて親しく通俗講話の理論と方法とを說述せられたるものを基礎となし更にこれに幾多の講話材料を增補してこの一卷を成す洵に斯界空前の新著たり苟も講壇に立たむと欲する人一たびこの書を繙かむか忽にして一個理想的の通俗講話者たるを得む

弊社はかゝる實益と趣味とを併せ有する名著を出版してこれを世の演壇上の人士及び將に演壇に立たむとする諸君の前に提供することを得たるを甚しく光榮とするものなり

東京小石川區原町六八六 東京振替貯金一五六八 丙午出版社 東京小石川區原町三五三 東京振替貯金一三一五 鷄聲堂

328
378

終